

実 践 編

目 次

- 事例Ⅰ 「自分の意思を伝えるために、主体的にサインを使っていくことを目指したT. Y
児の指導」
(中等部3年 男子) 11～22
- 事例Ⅱ 「伝える手段を身に付け、豊かにやり取りすることを旨したK. M児の指導」
(小学部2年 女子) 24～36
- 事例Ⅲ 「サインを用いて、かかわりの対象や話題を広げていくことを旨したN. Y児の
指導」
(高等部3年 男子) 37～47

【事例Ⅰ】 自分の意思を伝えるために、主体的にサインを使っていくことを目指したT. Y児の指導

1 対象児の概要（初期アセスメント結果から）

(1) 対象児 T. Y (男) 中学部3年 CA14歳11か月（平成10年1月30日現在）

(2) 家族構成 両親，本人，姉（高2）

(3) 生育歴

- ・ 妊娠中，出産時：健康，正常分娩
- ・ 乳幼児期：首のすわり 3 か月
離乳 10 か月
座り 11 か月
一人歩き 1歳7か月



(4) 教育歴

- ・ H学園（3～6歳）
- ・ 本校小学部（昭和63年4月入学）

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 IQ：26 MA3：0（平成8年5月実施）
- ・ S-M社会生活能力検査 SQ：21 SA3：1（平成9年9月実施）

| 身辺自立 | 移動 | 作業 | 意志交換 | 集団参加 | 自己統制 |
|------|-----|-----|------|------|------|
| 3：6 | 4：8 | 2：9 | 1：8 | 3：1 | 3：6 |

(6) 身体機能

身体機能上の問題はないが柔軟性に欠け、つまずいた際に少しバランスを崩しただけでも転ぶことがある。また、指先を使った活動では、力が入ってしまい思うように動かすことができないなど、手指の巧み性に乏しい部分も見られる。口腔機能においては、舌の動きにぎこちなさがあり、発音できる音も限られている。

(7) 行動の様子

家庭，学校とも，生活の流れに沿って活動できるが，気に入らないことがあったときや疲れたときなど活動が滞ってしまい，その場から動こうとしないことがある。休み時間など，一人でいることが多く，いすに座って友達の様子を見たり，校内を歩き回ったりしていることもある。また，特定の友達を気にして，その友達に過度なかかわりをすることがある。

(8) コミュニケーション

○ 人やものとのかわりに関して（実践資料1参照）

家庭においては，遊ぶ際に共に笑ったりする様子がよく見られ，同じものを見て楽しむなどお互いの気持ちを感じ合う関係にある。また，自分の方に注目するように働きかけたり，父親とものやり取りを楽しんだりする様子も見られる。

学校においても、一緒に本を見るなど、お互いに笑って楽しむ様子が見られるが、それは教師からの働き掛けによるものが多い。本児から、「これを一緒に見たい」「これで一緒に遊びたい」などと働き掛けてくる様子はあまり見られない。



○ 認知的機能に関して (実践資料2参照)

「注意する力」

アセスメントから見られるように、本児は対象に注視し、弁別することができる段階にあり、弁別できる対象も多いと考える。しかし、靴を履き違えたり、紙以外の場所にのりを付けたりすることがある。これは「見る」対象が興味・関心のあるものに限られていて、興味がないとしっかり見るができないからではないかと考える。

「イメージする力」

アセスメントを見ると本児は、教師の言葉を聞いて写真カードを取るなど、「符号化する」段階にあるといえる。特に本児の場合、いろいろなマークを指さして言葉と符号化することに興味があるので、今後はそれを広げていくことで、符号化する対象も今以上に増えていくと考えられる。ただ、文字については、「りんご」の文字カードの形を覚えていて符号化できるものの、「りんご」の「り」はできないなど、平仮名の一文字の符号化はまだ不十分である。

「見通す力」

アセスメントにある「洞察する」段階にあり、日常生活で操作を必要とするものに対しては、ある程度見通して働き掛けることができる(テレビのスイッチの操作など)。しかし、周りの状況や一日の流れについては見通しが持てないことも多く、行動が滞ることも見られる。また操作するものについては、視覚刺激を伴うもの(ビデオやスイッチを押すと動いたり、色が変わったりするもの)などに興味を持っており扱うこともできるが、ボールなどほかのものへはあまり興味を示さない面も見られる。



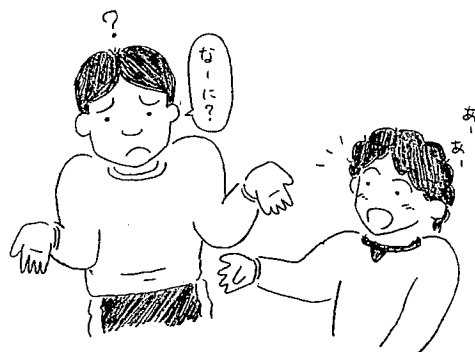
「模倣する力」

日ごろ見慣れている動きの模倣ができ、新しい動きの模倣についても、初めて見る教師の動きを模倣しようとする様子が見られる。また、家庭にある本で見た動物の模倣やテレビで見た野球選手の模倣を学校ですることもあり、「覚えた動きを模倣する」段階にあるといえる。

○ サインに関して (実践資料3参照)

複雑なサインについては覚えているが手指の巧み性に乏しいことから伝わりにくいものもある(「お母さん」のサインは小指を立てることが難しいので、人さし指を立てて「お母さん」とするなど)。また、本児が示すサインの中には、自分なりに意味付けをした独自のサインもある(「歩く」は手を振る、「うるさい」は耳をふさぐなど)。

家庭では、要求場面などその場所に行き、指さしと「あー」という発声で伝わるのでそれで済ませてしまうことが多く、あまりサインは使わない。ただ、場面によっては、本児なりに何かを伝えようとすることもあるが、家族にもそれが分からないことがあり、本児の機嫌を損ねることもある。また、理解言語も多く、サインと言葉を符号化することもできるので、サインを多く覚えられると考える。



学校では、「養護・訓練の時間における指導」などで覚えたサインの数は少しずつ増えてきているが、伝達手段としては指さしと発声によるものが多く、教師も本児が伝えたいことを理解できないこともある。また自分からサインを使うことは少なく、教師の言葉掛けや会話を聞いてときどき使う程度である。

(9) 本児の現在の課題

- 本児の興味・関心のある遊びが少なく、教師と遊びの場面でのかかわりが広がらないことや、要求などがまだ伝わらないことが多いことから、本児から教師へ遊びや要求場面でかかわりたい、伝えたいという気持ちが十分に高まらず、サインなどを使って伝えてくることも少ない。(教師との「並ぶ関係」「提示の関係」を深める、覚えたサインを使えるようにする)
- 認知的機能についてはそれぞれに高い段階にあるが、アセスメントを見ると興味・関心の対象が狭いことや周囲の状況や一日の流れに見通しが持ちにくいことが見られる。(「見通す力」を高める)

2 子供や保護者の考える将来の生活及び要望 (子供や保護者の意見を聞く会より)

(1) 子供や保護者の考える将来の生活

- ・ できれば就職させたい。家庭から離れて、社会に出る経験をさせたい。
- ・ 進路については明確に考えていないが、共同生活をさせてみたい。
- ・ 余暇を楽しむことができればよい(ダンスや音楽などの活動を通して)。

(2) 子供や保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 自分の伝えたいことが伝わらずいららすることがある。自分の伝えたいことが相手にうまく伝えられるようになってほしい。
- ・ 言葉や文字についても可能性があるなら、取り組んでほしい。

イ その他に関する要望

- ・ 外出したときに、公の場で騒いだり、滞ったりすることがある。それがなくなってほしい。
- ・ 遊びなど興味の対象が広がってほしい。

3 指導方針

(1) 本児の将来の生活について

「子供や保護者の意見を聞く会」の中で本児の将来の生活について話し合い、次の三つの要望が大切になることを共通理解した。

- ① 将来、社会へ出ていろいろな経験を積ませたい。そのためにも、かかわる相手との意思の疎通がうまくできるようになってほしい。
- ② 行動の滞りが見られるので、それをできるだけなくしたい。
- ③ 余暇の生活も考えて、興味あるものを増やしたい。

(2) 本児の現在の課題と将来の生活を考えて（学校・学部目標設定の考え方）

本児の現在の課題と将来の生活を考えて次の方針を設定することにした。

- ① サインなどの相手とやり取りできる伝達手段を使って、気持ちを伝えることができるようにする。

本児の場合、相手に気持ちが伝わらずにいらいらすることもあり、何らかの手段でまず気持ちを伝えることが大切になる。相手に気持ちが伝わることで、伝えたい意欲も高まり将来、社会へ出たときに主体的に相手とやり取りし、楽しく生活できることへと発展していくと考える。伝達手段としては、将来の生活を考えると、言葉のみでなくサインや文字なども使い、本児の気持ちが伝わることを第一に考えていきたい。

- ② 家庭や学校での決まった活動や一日の学習の流れなどに見通しを持って、主体的に活動できるようにする。

行動の滞りについては、①の相手に気持ちが伝わらないこともあるが、それ以外に自分の活動に見通しが持てず滞ってしまうことも一つの要因として見られる。本児が、家庭や学校での活動に見通しが持てるようになることで、主体的な活動も増えてくると考える。

- ③ 本児が家庭で興味・関心を持っている遊びについて、学校でも共通してかかわっていくなどして、その対象を広げる。

興味・関心のある遊びが少ないので、まずは本児の興味のある遊びから、かかわっていき、そこから遊びの対象を増やしていきたい。

(3) 具体的な指導について（学期目標設定の考え方）

- ①・③を踏まえて（人やものとのかかわり、サインについて）

本児と興味を持つ遊びを一緒に行う中で、伝えたいという意欲を高め、サインなどで伝えることができるようにする。（遊びを通して「提示の関係」を深め、その中でサインも使っていく）

本児が家庭で父親と楽しんでかかわっている歌遊びやテレビの話題などを学校でも取り上げ、一緒に歌遊びをしたり、新聞を見たりする中で本児からの主体的なかかわりを引き出したい。またかかわりの中では、本児との遊びを少しずつ増やしていくことで、遊びへの興味・関心を広げていきたい。

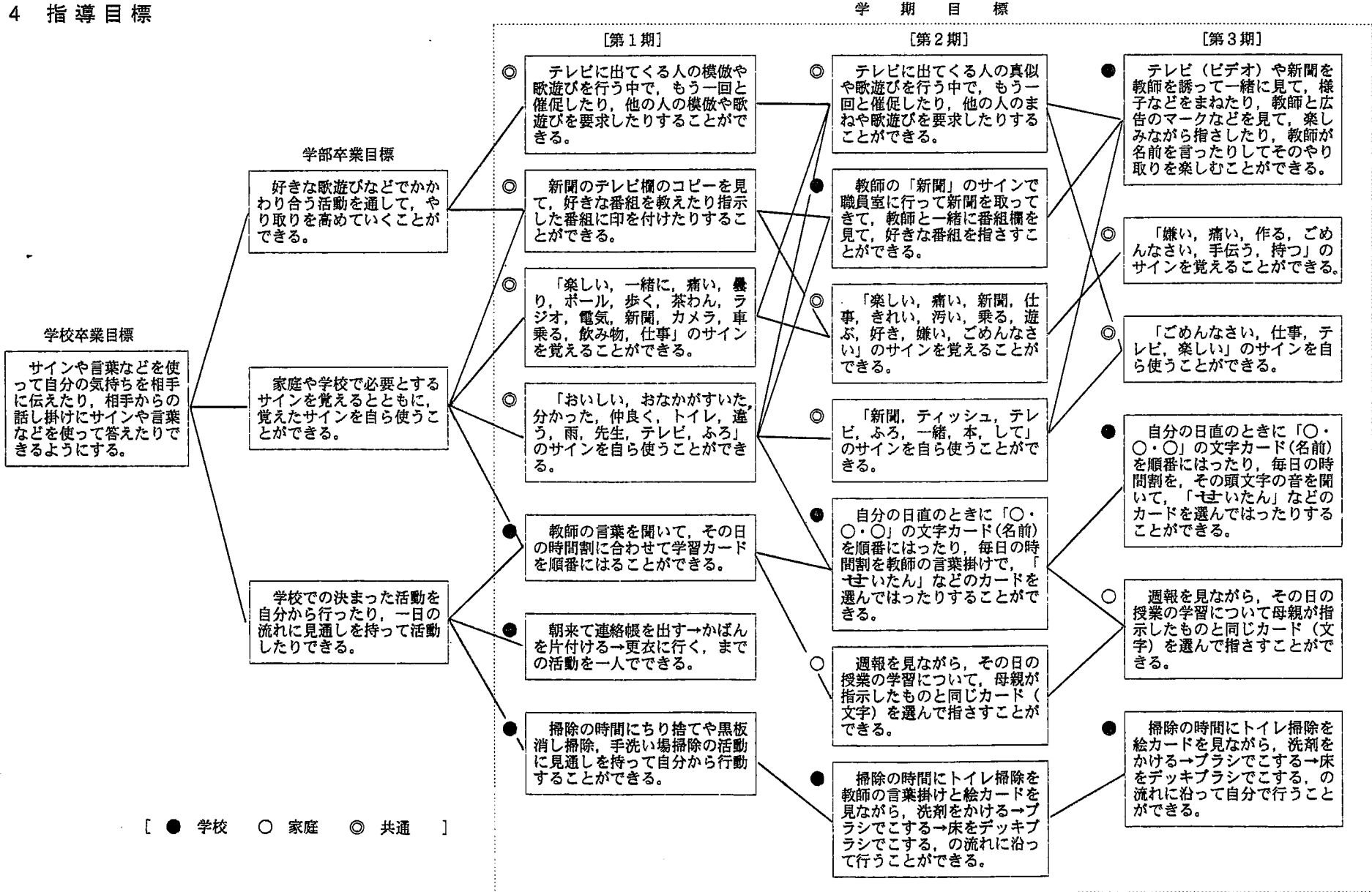
伝達手段として使うサインは、家庭とも連携を図りながら、本児とのかかわりの中で使うサインや現在の生活で本児にとって必要となるサインを覚えさせ、家庭と学校で共通して使っていくことで本児が自ら使うことができるようにしていきたい。

- ②を踏まえて（認知的機能について）

一日の学習活動や掃除などを教師の言葉掛けや絵カードなどを見ながら一緒に行うことで、見通しを持って活動できるようにする。（見通す力を高める）

活動の中で、何があるのか、どんなことをするのかを本児が理解し、主体的に活動できるように、絵カード、文字カードをサインとともに活用して取り組んでいきたい。また本児の将来の伝達手段の一つとして考えられる文字（平仮名）についても、学習の内容を提示する中で意識させていきたい。

4 指導目標



5 指導内容及び指導の経過①

| 学部目標 | | 好きな歌遊びなどでかかわり合う活動を通して、やり取りを高めていくことができる。 | | |
|------|---|---|---|--|
| 学年目標 | | | | |
| 学期目標 | 1 期 (平成8年度3学期) | 2 期 (平成9年度1学期) | 3 期 (平成9年度2学期) | |
| | 指導内容 | <p>新聞のテレビ欄のコピーを見て、好きな番組を教えたり、指示した番組に印を付けたりすることができる。</p> | <p>教師の「新聞」のサインで、職員室へ行って新聞を取ってきて、教師と一緒にテレビ欄や広告の欄を見て、好きなものを指さすなどができる。</p> | <p>テレビ(ビデオ)や新聞を教師を誘って一緒に見て、様子をまねたり教師と広告のマークなどを見て、楽しみながら指さしたり、教師が名前を言ったりしてそのやり取りを楽しむことができる。</p> |
| 指導内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ テレビ欄を通して、本児が気に入って指さしたテレビ番組を教師が言ったり、一緒に見たりすることで、かかわりを深める。 ○ テレビ欄を見る際に、「テレビ」「先生」のサインを教師と一緒に言う。 ○ 好きなテレビ番組以外にも注目させ、かかわることで、興味あるテレビ番組の幅を広げる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ テレビや広告の欄を通して、教師が尋ねると本児が好きなものを指さしたり、教師が好きなものを言って本児が指さしたりして一緒に新聞を見るかかわりを深める。 ○ 「新聞」「見る」「テレビ」「好き」「楽しい」などのサインを一緒に言う。 ○ テレビ欄以外に広告やその文字にも着目させ多くの文字(形)との符号化を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ テレビ(ビデオ)や新聞を見て、そこに出てくる人の様子を一緒にまねたり、お互いにまねし合ったりして楽しみ、かかわりを深める。 ○ 教師の「何をする」の言葉掛けに、自分から「テレビ」や「新聞」のサインを使ってその遊びを一緒に言う。 ○ 新聞や広告を切り抜いて集めたカードを使い多くの文字(形)との符号化を図る。 | |
| 指導経過 | <p>【学校での取り組み】 「テレビ欄の番組を見よう」という教師の働き掛けに、本児も一緒に新聞を取りに行き、楽しむようになった。番組名を指さしたものを教師が言ったり、教師が番組について尋ねたりする中で、「違う」「お父さん」などのサインや番組をイメージした動きも見られた。本児自身もこのやり取りが好きであったが、教師からの働き掛けで一緒に遊んで楽しむという段階であった。</p> <p>【家庭での取り組み】 好きな番組に印をつけたコピーを持ち帰り、母親に教えるなどして学校、家庭で共通の話題を作っていた。また、連絡帳を利用して、本児が家庭でその日に見たいと思ったテレビ番組を教えるもらうことで、学校でも同じ話題で取り組んだ。その中で、家庭と学校の両方で自分の好きな番組を伝えることができ、喜ぶ様子が見られた。</p> | <p>【学校での取り組み】 新聞については、教師の働き掛けで、一緒に見て、指さしたりサインで表したりして楽しむことはあったが、自分から働き掛けを見ることは少なかった。途中から、新聞よりもビデオを見ることへ関心を示し、ビデオと一緒に選んだり、見たりするかかわりも増えてきた。また、教師の服のマークや広告のマークを気に入り、教師が名前を言ったものを本児が指さしたり、逆に本児が指さしたものを、教師が言ったりしてそのかかわりを楽しんだ。</p> <p>【家庭での取り組み】 家庭にお願いし、見たテレビを連絡帳に書いてもらったり、好きな広告のCMを尋ねたりし、家庭と学校で共通して、それについて言葉掛けしたり、その内容の番組を選んだりすることで、本児からの指さしやサインが多くでるようになった。</p> | <p>【学校での取り組み】 休み時間に過ごし方を本児に尋ねるなどする中で、本児がビデオを教師に手渡したり、サインで見たいことを自分から伝えたりする様子が見られるようになった。ビデオを見ながら面白いせりふや様子を教師がまねることを楽しみ、それをサインで要求したり、一緒に行ったりした。新聞や広告でのやり取りでは、本児から切り抜いたカードを持ってきて、教師と一緒にのかかわりを楽しむ様子が見られた。また、服のマークでのやり取りも広がり、他の教師にもその内容でかかわっていく様子が見られた。</p> <p>【家庭での取り組み】 新聞や広告の切り抜きをコピーして渡し、家庭でも同じ話題での遊びを楽しんだ。また、本児が学校で遊んでいる様子をビデオで知らせたり、話をしたりして、家庭でのかかわりへと広げた。</p> | |
| 評価 | B | A | A | |
| 考察 | <p>教師が働き掛けることが大半であったが、一緒にやり取りを高めていくことができた。今後は、本児が積極的に教師との遊びにかかわるような課題を設定するとともに、サインを取り入れたかかわりをもっと増やしていきたい。</p> | <p>本児からの働き掛けを増やし、遊びの幅を広げるために、今後は本児の好きな内容を中心にかかわってあげたい。また、本児が興味を持ち始めたビデオやマーク遊びも通じてかかわっていくなかで、やり取りをさらに深めていきたい。</p> | <p>ビデオや広告は、言葉掛けや広告のカードを作成することで、自分からその遊びでかかわることも多かった。他の教師が共通した遊びでかかわったことや服のマークなどかかわる話題が近かったことから、かかわりも広がった。</p> | |

指導内容及び指導の経過②

| | | | |
|------|---|--|--|
| 学部目標 | 家庭や学校で必要とするサインを覚えるとともに、覚えたサインを自ら使うことができる。 | | |
| 学年目標 | | | |
| 学期目標 | 1 期 (平成8年度3学期) | 2 期 (平成9年度1学期) | 3 期 (平成9年度2学期) |
| 指導内容 | <p>「おいしい、おなかがすいた、分かった、仲良く、トイレ、違う、雨、先生、テレビ、ふろ」のサインを自ら使うことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教室にサインのプリントを掲示して、教師が使っていく中で、本児への意識付けを図る。 ○ サインを使う場面を多くする。 (朝の会や給食など、場面を適宜とらえて、教師の方からサインを使って働き掛けたり、本児からのサインを引き出したりする) ○ 家庭では、冷蔵庫の前にサインのプリントをはり、それを見ながら母親、本児ともに使っていく。 | <p>「新聞、ティッシュ、テレビ、ふろ、一緒、本して」のサインを自ら使うことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教室にサインのプリントを掲示して、教師が使っていく中で、本児への意識付けを図る。 ○ 遊びなど要求場面の中でサインを使うようにする。(好きな遊びを通して、「新聞、テレビ、本」のサインを「○○して」のサインと合わせて使う) ○ 家庭では、冷蔵庫の前にサインのプリントをはり、それを見ながら母親、本児ともに使っていく。 | <p>「ごめんなさい、仕事、テレビ、楽しい」のサインを自ら使うことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教室にサインのプリントを掲示して、教師が使っていく中で、本児への意識付けを図る。 ○ 興味ある活動を通して、サインを使うようにする。(家で見たテレビの話題や学校での楽しかった活動を通して、教師がサインとともに働き掛けていく) ○ 本児の気持ちを伝える機会を教師が適宜とらえてサインを促す。 (「ごめんなさい」「楽しい」のサイン) |
| 指導経過 | <p>【学校での取り組み】 給食前に本児におなかがすいたかを尋ねたり、帰りのあいさつなどで、言葉にサインを添えて言葉掛けを行ったりしていくことで、本児からの自発的にサインを使うようになってきた。特に学習でよく出るものや、要求場面に出てくるサインについてはよく使っていた。(おなかがすいた、トイレ、分かった、先生、雨)</p> <p>【家庭での取り組み】 家庭では、「ふろ」のサインを自分から使えるようにということであった。本児は、下校後更衣して、ふろに入るので、家庭でもその場面に合わせて使うようにした。「ふろ」のサインについては自分から使うこともあったが、本児があまり好きではないので頻繁に使うことはなかった。またほかのサインについては、「おなかがすいた」はよく使っているということであった。</p> | <p>【学校での取り組み】 新聞やテレビについては、休み時間に教師とかわるなかで、それが見たいときにサインを使って要求する場面が見られるようになった。1学期後半からは、興味はビデオに集中し、「テレビ」のサインでビデオの視聴を要求することも多く見られるようになった。「本」のサインは、図書委員会の活動の中で見られることもあった。また、場面や状況を見通して、本児から「○○して」や「一緒」のサインも使うようになってきた。</p> <p>【家庭での取り組み】 家庭でも余暇の過ごし方としては、ビデオの視聴が中心であり、「テレビ」のサインでビデオ視聴を要求することが多かった。また形態を覚えただけの「楽しい」のサインについて、校内宿泊学習の後、家庭でサインのプリントを指さし、教えたとのことであった。</p> | <p>【学校での取り組み】 運動会の練習の後に、本児から「楽しい」のサインが出てきたり、注意された後に「ごめんなさい」のサインも出るようになってきた。楽しい行事などの場面に教師と一緒に本児にサインを促していき、本児の気持ちをサインで返してやることで、気持ちが伝わる喜びも見られた。「テレビ(ビデオ)」のサインは、2期からの継続で遊びの中で、見ることを要求するときに使うことが多かった。また、「仕事」のサインは現場実習などの活動で一緒に使っていくことで、教師の言葉に自分からサインを使うことも多くなった。</p> <p>【家庭での取り組み】 連絡帳で使ったサインについて書いてもらったり、本児が使ったサインを場面などについて知らせたりして、家庭でも機会をとらえて、サインを使っていくようにした。</p> |
| 評価 | C | B | A |
| 考察 | 本児の要求場面や好きなこと、学校の決まった活動の中では、自分からサインを出す機会も多かったが、それ以外ではあまり使うことがなかった本児の要求場面などを的確にとらえて、自らサインを使いやすい内容を設定していきたい。 | 活動や状況を見通してサインを使う様子が見られた。ただ「ティッシュ」は、指導の機会をとることが難しく使うこともほとんどなかった。サインのプリントを通して、本児が気持ちを伝えられたことを今後につなげていきたい。 | 家庭・学校で連携して学習場面などの機会をとらえてサインを使うことで増えていった。特に「楽しい」のサインは、行事の中など本児が喜ぶ場面でサインと一緒に使ったり、気持ちを受け止めたりしたことが増えたことにつながったと考える。 |

指導内容及び指導の経過③

| | | | |
|------|--|---|--|
| 学部目標 | 学校で決まった活動を自分から行ったり、一日の流れに見通しを持って活動したりできるようにする。 | | |
| 学年目標 | | | |
| 学期 | 1 期 (平成8年度3学期) | 2 期 (平成9年度1学期) | 3 期 (平成9年度2学期) |
| 学期目標 | 教師の言葉を聞いて、その日の時間割に合わせて、学習カード(音楽など)を順番にはることができる。 | 教師の言葉を聞いて自分の日直のときに「○・○・○」の文字カード(名前)を順番にはったり毎日の時間割の学習カード(せいいたんなど)を選んではっきりすることができる。 | 自分の日直のときに「○・○・○」の文字カード(名前)を順番にはったり、毎日の時間割をその頭文字を聞いて、「せいいたん」などのカードを選んではっきりすることができる。 |
| 指導内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の言葉掛けやサインを見て、一日の学習の流れを学習カードで確認しながら、カードをはる。 ○ 教師の言葉「おながく」と学習カード「音楽」のマッチングをする。 ○ 「音楽」など、学習カードにあるサインを教師と一緒に使う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の言葉掛けやサインを見て、一日の学習の流れを学習カードで確認しながら、カードをはる。 ○ 教師の言葉を聞いて、名前の文字カードを選んだり、平仮名の学習カードを選んだりする。 ○ 学習カードにあるサインを教師と一緒に使う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の言葉掛けやサインを見て、一日の学習の流れを学習カードで確認しながら、カードをはる。 ○ 教師の言葉を聞き、名前の文字カードを選んだり、頭文字を聞き学習カードを選んだりする。 ○ 学習カードをはりながら、その学習のサインを使う。 |
| 指導経過 | <p>【学校での取り組み】 本児が分かっているものもある漢字の学習カードで取り組んだ。最初は、2枚のカードの中から選択させ、徐々に数を増やして選択させていき、全部の学習カードについて、はることができるようになった。また、その中で学習の節目のサイン(給食・更衣)なども見られるようになり、一日の学習の流れを確認していくことが見られた。サインについては、教師がカードの選択を中心に指導したため、本児と一緒に使っていくことが少なかった。</p> <p>【家庭での取り組み】 週報を見て、その日にある学習について、母親が知らせ、一緒に指さして確認したり、下校後その日の学習について、本児に尋ねるなどの取り組みの中で、一日の学習について本児から尋ねる場面も見られるなど、一日の学習を意識する様子が見られた。</p> | <p>【学校での取り組み】 教師の言葉を聞いて、「せいいたん」など平仮名の頭文字を強調したカードを選択していったが本児が活動に興味を持って取り組めたので、2期後半には、ほとんどできるようになった。その中で一日の学習にも見通しを持ってきたようで、4時間目の学習の後に、「給食」のサインをするなどの様子が見られた。また、おながかすいたときなども、自分で学習カードを指さし教師と確認しながら「まだ」のサインを出し、食べたい気持ちをコントロールする様子も出てきた。</p> <p>【家庭での取り組み】 母親が紙に平仮名でその日の学習を書き、読むことで本児がそれを指さしたり、下校後本児に今日あった学習について聞くことで、学習や学習内容をサインで表させたりして取り組んできた。本児から、その日の学習をサインで教えることもあった。</p> | <p>【学校での取り組み】 学習カードは、教師が頭文字を指さし、読むことで選んでいった。始めは2、3枚の中から行い全部のカードから選べるようになった。カードを教師と選ぶことが好きな活動になり、自分から取り組む姿も見られた。3期後半は、係が書いた漢字の文字を見ながら選ぶこともできた。その中で学習への見通しも高まり、授業が終わると次の授業の学習カードを指さしたり、サインを使ったりする様子も見られた。また、サインは学習カードを確認する中で教師と一緒に正しいサインに行い、徐々に自分からサインを使う様子も見られるようになった。</p> <p>【家庭での取り組み】 学校で使っている学習カードと同じカード(パネル式)を作って渡し、家庭でも取り組んだ。週報を使ってその日の学習について選んだり、下校後何があったか尋ね、カードを選んだりしてきた。</p> |
| 評価 | A | A | A |
| 考察 | 本児の興味・関心と認知的機能の力から予想以上にすぐ選ぶことができるようになった。2期では、保護者の要望でもある平仮名に視点を置いた取り組みをしていく。 | 平仮名の学習カードについても言葉を言うようになり、3期は頭文字(平仮名1文字)に視点を置いて取り組んでいく。学習に見通しが持てるようになってきたことで、自分の気持ちや行動を調整できる部分も多くなった。 | 興味ある活動で、教師とサインを使っていったことが学習への見通しを高くし、サインで次の学習を教えることも出てきたと考える。また、学習カードもすべてはれるようになり、平仮名の文字と音声とマッチングできるものも増えた。 |

6 考察とまとめ

(1) 1期の全体考察

1期では、まず本児と好きな遊びを一緒に行う中で、同じものを見て楽しむ「並ぶ関係」が高まり、その中でサインもいくつか使うようになった。これは、アセスメントから家庭で好きな遊びを知り、それを学校でも行い、共通して取り組んだことに起因するといえる。興味ある遊びが少ない本児にとって、好きな遊びを家庭・学校で共通して行い、かかわっていくことで教師と遊ぶ楽しさ、遊ぶ楽しみが倍増したことが本児とのかかわりを大きく深めたと考える。

サインについては、「まだ」「更衣」などが家庭、学校でも見られるようになってきた。これは、保護者との連絡帳に家庭で使ったサインについて書いてもらったり、学校で使ったサインを連絡帳に書いたりして取り組むことで、本児の伝えることの充足感が、伝える機会、場面を増やしてきたと考える。サインの中で必要と考えるものについても家庭と話し合い、具体的に目標に挙げて取り組んだが、使うことは少なかった。これは目標に挙げたサインの数が多すぎたため、保護者や教師、本児の意識が薄くなってしまったことが考えられる。また、本児と遊ぶ際も、まだ教師からの働き掛けが多く、本児からサインを使うことがあまりなかったり、本児自らがサインを使う機会を設定するまでに至らなかったりしたためだと考える。



一日の活動の流れについては、時間割どおりに学習カードをはることに取り組んできたがすぐにはできるようになり、次の学習を教師と指さすなど流れを意識する場面も見られた。これは、ここでの言葉とカードのマッチングが、本児にとって興味のある活動になり、教師と一緒にカードはりを楽しむ（提示の関係）ことができたためだと考えられる。また、家庭でも、同じようにマッチングをして学習を確認したこともその成果といえる。

(2) 2期の全体考察

2期に入ると、教師の働き掛けだけでなく、一緒に遊ぶ中で、本児が自分のすることを見てほしい、というような「提示の関係」が見られるようになった。これは、教師が1期での遊びの内容を広げていったことで、本児の遊びの中で伝えたいこと（これを見てほしい、してほしい）が増えてきたからだと考えられる。また、この間も連絡帳を利用して、本児の好きな話題で共通してかかわったことにもよるだろう。2期の後半からは、ビデオを見ることや服のマークを指さして遊ぶことに興味を持ち、自分から教師にかかわる姿も見られた。これは、1期の取り組みで、家庭での遊びを学校でも教師と楽しめたことが、自ら教師に自分の好きな遊びを伝える働き掛けにつながってきたと考えられる。

かかわりが深まるにつれてサインもよく使うようになってきた。特に2期の後半になると、「一緒」のサインを場面や状況に応じて使うことが見られた。最初は同じものを指さして「一緒」のサインを使うだけだったが、何か活動をするときに教師の方を見て、「一緒」のサイン

を使う姿が見られるようになった。これは、教師と「一緒にしたい」という気持ちの表れたサインであり、本児とのかかわりが深まったから見られたものだと考えられる。

このような、気持ちを表すサインについては家庭でも見られた。校内宿泊の後、母親に楽しかった気持ちを、冷蔵庫にはってあるサインのプリントを指さし教えたとのことであった。このことは理解言語が多く、認知的機能の高い段階にある本児が、まだサインを覚えていない母親に自分の気持ちを伝えるために、サインのプリントを使った場面であり本児の気持ちを伝える有効な手段だったと考



える。そしてこれは、教師が保護者にサインの連携を図るために渡していたプリントを冷蔵庫にはっていたためであり、本児の母親への働き掛けが家庭にサインを意識付け、理解を深めた場面でもあったと考えられる。

学習カードについては、保護者の要望でもある平仮名へと視点をおいたカードを使って一日の活動を教師の言葉掛けで順番にはっていった。その中で、学習の大まかな流れを見通した様子が見えてきた。「給食」や「更衣」については、学習カードをはるとき以外にも、教師に流れを確認する意味でサインで尋ねてくることがあった。これは、自分自身で流れを確認し納得することで、本児が「給食を食べたい」「更衣がしたい」という気持ちをコントロールしていたと考えられる。

(3) 3期の全体考察

3期に入ると、教師との遊びの中で、広告を切り抜いて集めたカードや服のマークでのやり取りが深まっていった。これは本児の好きな広告のカードを作成したことで、教師に働き掛ける対象（広告カード）がすぐそばにあり、楽しみな話題で何度も働き掛けることができたためだと考える。2期から見られる服のマークでのやり取りも同じことが考えられる。担任教師の服のマークでのやり取りが深まったことで、自分の服や近くにいる教師の服へも興味を持ち、



自分からかかわって遊びを楽しむ姿へと発展していったのであろう。ここでは、本児のかかわる対象となるものが、目の前にあったことが、本児のかかわりを広げていったといえる。

かかわる楽しみ、対象が広がったことで、本児がサインで伝えることも広がってきた。服のマークでのやり取りでは、同じマークを見つけて「一緒に」のサインを使う様子が多く見られた。これは教師がサインを使ってやり

取りするうちに、「一緒」のサインを教師と一緒に使うこと自体が楽しみになり、それが遊びの中に取り入れられ、自ら使うようになったためだと考える。同時に周りの教師が本児の遊びを理解し、「一緒」のサインを使ってかかわったことも大きな要因であろう。このことで、本児がサインを使うことも増え、「一緒」のサインだけでなく、ほかのサインで周りの教師へ伝えようとするが見られたと考える。また、「楽しい」のサインのように、本児が自分の気持ちを伝えるサインも見られるようになった。これは、2期で覚えた「楽しい」のサインを、本児が楽しんでいる行事や遊びなどをとらえてサインを促していったことによるだろう。楽しいという気持ちを一緒にサインで表すことで、分かってくれる人がいて、その気持ちを教師と共有できる喜びをサインで確認できたからであると考えられる。

学習カードについては、漢字カードを見て、自分で平仮名のカードをはる姿が見られた。これは、家庭・学校と同じ形式のカードを作り取り組んできたことにもよるだろう。1期から段階的にカードやその言葉掛けを工夫してきたことも、本児の平仮名への意識を高め、文字と言葉のマッチングができるものを増やしたと考える。学習への見通しも高くなり、授業の後に次の学習カードを指さしたり、サインを使って教えたりするようになったが、これは学習カードのほかに言葉・サインも一緒に指導していったことで、学習を関連付けやすくなったこともいえるであろう。

(4) ま と め

- ・ アセスメントから、本児の課題をとらえて指導したり、家庭・学校と共通した取り組みをしたりする中で、本児とのかかわり（「提示の関係」）が深まり、遊びの内容も広がり本児からかかわる姿が多く見られるようになった。また、担任教師だけでなく、ほかの教師に同じ遊びでかかわっていく姿へと発展していった。
- ・ 教師とのかかわりを深める中で、要求場面以外にも自分からサインを使うことが増えてきた。また、状況や場面に応じたサインや行動を調整するサインも見られるようになった。家庭・学校でサインで伝わる喜びが増したことで、本児がサインを使って様々な人に主体的にかかわる様子が見られるようになった。
- ・ 家庭・学校で決まった活動へ取り組んだり、一日の学習について確認したりする中で、本児が自分で考えて行動する姿が多く見られるようになった。

7 今後の課題

- ・ 本児が、今後やり取りを深めるための対象（もの）の模索。
- ・ 本児の気持ちを表すサインなど、抽象的なサインの習得。
- ・ 本児がサインを使える場の設定と教師の働き掛けの工夫。
- ・ 家庭と学校での更なる連携とサインを使うための環境の工夫。



T. Y児のサイン・文字の習得状況

[1 期]

○ 覚えているサイン (1期:平成8年3学期現在)

| | | | | |
|--------|--------|---------|-------|-----|
| ・ ペン | ・ 靴 | ・ 牛乳 | ・ 自転車 | ・ 本 |
| ・ ピアノ | ・ はし | ・ ティッシュ | ・ コップ | |
| ・ 机 | ・ いす | ・ かばん | ・ 電気 | |
| ・ ぶらんこ | ・ 電話 | ・ スプーン | ・ カメラ | |
| ・ 先生 | ・ すべり台 | ・ 帽子 | ・ 茶わん | |
| ・ 歯磨き | ・ ハンガー | ・ 休み | ・ ボール | |
| ・ 終わり | ・ 食事 | ・ はさみ | ・ 違う | |
| ・ 始まり | ・ テープ | ・ 時計 | ・ 分かる | |
| ・ 勉強 | ・ お母さん | ・ 車 | ・ 曇り | |
| ・ ~して | ・ お父さん | ・ おいしい | ・ 歩く | |
| ・ 見る | ・ ふろ | ・ 病気 | ・ 一緒 | |

○ 覚えていて、学校・家庭で使うサイン (1期:平成8年3学期)

| 学 校 | | 家 庭 |
|-----|--|--|
| サイン | 状 況 | |
| 更 衣 | ・ 早く着替えをしたいときに要求する形で使ったり、最後の授業の後に次の活動(更衣)を確認するときに使ったりする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ まだ ・ ドライブ(車) ・ おなかがすいた ・ 寒い ・ テレビ ・ 寝る ・ くさい ・ うるさい |
| ま だ | ・ 教師に学習活動について尋ねてきて、その活動の時間がきていないと知らせたときに、自分で使う。 | |
| 雨 | ・ 雨が降っているとき。 | |
| だ め | ・ 手で×をつくる。友達や自分が注意されたとき。 | |
| トイレ | ・ トイレに行くとき。(下腹部を触る) | |
| 音 楽 | ・ 音楽の授業が始まる前。 | |

○ 音声と文字のマッチング状況

- ・ いくつかのひらがなの中から選択できた音
[あ い う え お か き こ さ た]
- ・ 間違ふことがあるが選択できる音
[す せ そ つ と し]

[2・3期]

○ 覚えたサイン

| | | | | |
|-------|-------|----------|-------|------|
| ・ 楽しい | ・ きれい | ・ 好き | ・ 手伝う | ・ 数学 |
| ・ 痛い | ・ 汚い | ・ 嫌い | ・ 持つ | ・ 美術 |
| ・ 新聞 | ・ 乗る | ・ ごめんなさい | ・ 生単 | ・ 体育 |
| ・ 仕事 | ・ 遊ぶ | ・ 作る | ・ 国語 | ・ 作業 |

○ 自ら使ったサインの一例

| | 月 日 | サイン | 場 面 | 状 況 |
|--------|----------------|---------|------------------------|---|
| 2 期 | 4月25日 | 走る | 家 庭 | 小運動会でどんなことをするのかを母親に尋ねられたとき。 |
| | 5月6日 | 休み | 学 校 | 「バスや電車の利用」の学習で、山形屋へ行ったときに閉店だったのを見て。 |
| | 5月21日 | おなかがすいた | 家 庭 | 就寝していて、夜中に目が覚め、「どうしたの」と聞かれて。 |
| | 6月2日 | 楽しい | 家 庭 | 「校内宿泊」を終えた日の夜に、冷蔵庫にはってあるサインのプリントを指さして。 |
| | 6月7日 | 一緒 | 学 校 | 共通作業で、分担作業を促されて、担任教師の顔を見て。 |
| | 7月・8月 (夏休み) | 車 | 家 庭 | マクドナルドに行きたくて、広告用紙を指さし、「くるま」のサインをして要求。 |
| 3 期 | 9月5日 | 母親 | 学 校 | 教育相談のある日に、教師の服装を見てサインを使って母親が来ることを教える。 |
| | | 帽子 | 学 校 | 好きな運動会の練習に早く行きたくて。 |
| | 9月9日 | ごめんなさい | 学 校 | 生単の時間、H先生に手を出し、注意され、その後の給食時間に。 |
| | 9月10日 | 楽しい | 学 校 | 運動会のリズムの練習の後、帰る途中に担任教師の肩をたたき、教える。 |
| | 9月12日 | 一緒に | 学 校 | O先生とY先生のジャージのメーカーが一緒であるのを見て、指をさした後に。 |
| | 9月19日 | 本 | 学 校 | 美術「こんな仕事をしてみたい」の中で、仕事にはどんなものがあるか尋ねられて。 |
| | 9月24日 | まだ | 学 校 | 帰りの更衣の際に教室にいる本児に「更衣に行かないの?」と言葉を掛けたときに。 |
| | 10月2日 | 一緒に | 学 校 | 作業の時間、分担活動を始める前に、実習生に対して。 |
| | | 更衣・まだ | 学 校 | 授業中、実習生に対して、早く帰りたい気持ちを表して。 |
| | 10月7日 | 先生・ぼく一緒 | 学 校 | 教師の靴下と自分の靴下を指さして、マークが一緒であったのを見て。 |
| | | 先生 | 学 校 | 車のおもちゃを転がして教師とかかわっていたときに担任教師とその遊びがしたくて。 |
| | 10月27日 | 楽しい | 実習先 | 現場実習先で一緒に仕事をしている担任教師に、仕事をしながら。 |
| | 10月31日 | 腹がすいた | 実習先 | 現場実習先で、おやつ時間が近くなり、社長さんに対して。 |
| 11月19日 | 本・きれい | 学 校 | 委員会の時間に目標を決めるときに手を挙げて。 | |

○ 音声とマッチングできる文字

[せしびろすがく]

【事例Ⅱ】 伝える手段を身に付け、豊かにやり取りすることを目指したK. M児の指導

1 対象児の概要（初期アセスメントの結果から）

(1) 対象児 K. M (女) 小学部2年 CA 8歳5か月 (平成10年1月30日現在)

(2) 家族構成 両親, 本人, 祖母

(3) 生育歴

- ・ 出産時：出産直後は泣かなかった，黄だんあり
- ・ 乳幼児期：離乳 0歳5か月 座り 1歳0か月
首のすわり 0歳8か月 一人歩き 2歳0か月

(4) 教育歴

- ・ S福祉センター 2歳8か月～3歳7か月 歩行訓練
- ・ M学園（福岡の福祉施設） 3歳8か月～4歳7か月
- ・ 本校小学部（平成8年4月入学）

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 IQ： 33 MA 2：10（平成9年5月実施）
- ・ S-M社会生活能力検査 SQ： 43 SA 2：8（平成7年11月実施）

| 身辺自立 | 移動 | 作業 | 意志交換 | 集団参加 | 自己統制 |
|------|-----|-----|------|------|------|
| 3：3 | 2：4 | 3：3 | 1：3 | 2：7 | 3：6 |

(6) 身体機能

- ・ 手指については、右の親指の脱きゅうがあり、ほかの指もまっすぐ伸ばすことができない。しかし、できる範囲で手指を動かそうとする様子は見られる。
- ・ 身体の動きについてもぎこちなさがあり、ときどき転んでしまうこともあるが、身体を動かすことが大好きで、遊具や自転車などに積極的に取り組む様子が見られる。
- ・ 口の周りの動きについても、食事の際はかむことが不十分だったり、うがいができなかったりときこちなさがあり、発音もか細く「あっ、あっ」というようなものがほとんどである。

(7) 行動の様子について

- ・ 人なつこい性格で、自分から知っているサインを使ってかかわろうとするが、やり取りが続かない。
- ・ 家庭では、頑固な面があり、自分の思い通りにならないと気が済まないようであるが、学校では友達の強引なかかわりに何も言えずおどおどしていたり、担任にも自分の気持ちを伝えられなかったりすることがある。
- ・ 学習や日常生活場面では、繰り返しの活動により自分で見通しを持ち行動することができるが、注意力、集中力が続かない様子が見られる。

(8) コミュニケーション

○ 人やものとのかわりに関して（実践資料5参照）

- ・ 家庭においては、母親と目を見て気持ちを感じ合うというように、親密な関係である。また、本児のサインを母親が受け止め、言葉で本児に返すというやり取りの際に、本児が気に入らないことがあると「いや」と主張したり、怒ったりするというように、本児が自分の気持ちをぶつけられる存在である。
- ・ 担任にも、サインを使って話し掛けてくることがあり、言葉で返すとうなずいたり、首を振ったりしてやり取りする様子がある。しかし、そのやり取りは、いくつかのサインを繰り返し使うことで訴えるというようなものであり、話題に広がりが見られない。また、「トイレ」のサインをすることができるが、教師の言葉掛けがなければ自ら伝えることができないなど、自分の気持ちを積極的に伝えられるような関係には至っていない。

○ 認知的機能に関して（実践資料6参照）

「注意する力」に関しては、日常よく目にするものや自分の好きなものについては「弁別する」ことができるようである。しかし、「見る」ことはできても、興味・関心のあるもの以外には注意が持続しにくいといった実態が見られる。

「イメージする力」に関しては、自分の名前の平仮名カードを選べるなど、「符号化する」ことができるが、文字を言葉としてではなく形としてとらえている状態であり平仮名の読みとの対応は不十分である。

「見通す力」に関しては、固定施設や自転車といった身体を思い切り動かして遊ぶことのできる遊具に自らかかわっている。また、日常生活で繰り返していることについては、先を見通して行動する様子が見られる。しかし、手指の動きを伴うものについては、注視が続かず、目と手の協応が難しいというように、「ものに向かう」場面が限られている。

「模倣する力」に関しては、模倣場面で、本児のできる動きであれば「覚えた動きを模倣する」ことができる。しかし、「新しい動きを模倣する」際にも、手指の巧み性を伴う動きや左と右で違う動きをする分離模倣、自分の目で確認できない動きの模倣などは難しい場合が多い。

○ サインに関して（実践資料7参照）

手指の動きが不十分で、指で「2～4」を作ることが難しいが、「お母さん」のサインは左手の薬指を右手でさすことで表すなど、できる動きで表そうとする様子が見られる。また登下校で利用する「バス」のサインを「車」と「友愛バス」で表すなど、独自のサインやサイン連鎖も見られる。このように、日常生活場面で関心の高いサインを覚えたり、独自のサインで表したりする様子が見られる。



「お母さん」のサインを使っている様子

(9) 本児の現在の課題

本児の行動の様子を見てみると、本児は自分からサインを使ってかかわろうとすることができ、使うサインが限られており、やり取りが続かないといった様子が見られる。これは、「やりとりの関係」が深まっていない、習得しているサインが少ない、という状態である。

アセスメントから分かるように、本児はやり取りができるものの、遊びの際はものに向かう場面が限られていたり、やり取りのある遊びよりも、まだ並んで同じ遊びをすることを楽しむ状態である。また、担任とは共有する話題が少ないといったことから「やりとりの関係」が高まらないのではないかと考える。

また、やり取りが続かない理由として、本児が言いたいことを表す手段を十分に身に付けていないということが考えられる。アセスメントから、注意の持続が難しく、不可視的な模倣や左右の動きが違う模倣ができにくいといった実態が見られるので、その部分にアプローチしながら新しいサインを習得することができるようにしたり、「符号化する」ことを高め、自分の言いたいことをサインで表現することができるようにしたりする必要があると考える。

2 児童生徒、保護者の考える将来の生活及び要望（子供や保護者の意見を聞く会より）

(1) 保護者の考える将来の生活

- ・ 手に職を付けさせ、就職させて自立させたい。
- ・ 民間の企業がいいか、施設などがあるかは、実際の職場を見たことがないのでよく分からない。

(2) 児童生徒、保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 言語理解はできるが言葉がないので、相手に気持ちを伝える手段を身に付けさせたい。
- ・ 家では、嫌なことがあると、「いや」というように座り込んだり、寝転んだりして抵抗するが、学校などほかの場面では我慢することが多く、意思表示をあまりしない。家庭以外の場面でも意思表示ができるようになってほしい。
- ・ 様々な体験をさせて、話したい、伝えたいという気持ちを高めるようにしたい。

イ その他に関する要望

- ・ 基本的な生活習慣を確立させたい。
- ・ 集中力と持続力を身に付けさせたい。



担任とのやり取りの様子（「車」のサイン）

3 指導方針

(1) 本児の将来の生活について

「子供や保護者の意見を聞く会」から、将来の生活におけるコミュニケーションということ を考えるときに、次の二つの要望が大切になることを共通理解した。

- 相手に気持ちを伝える手段を身に付けさせたい。
- 様々な体験をさせて、話したい、伝えたいという気持ちを高めるとともに、家庭以外の場でも意思表示ができるようになってほしい。

(2) 本児の現在の課題と将来の生活を考えて

本児の現在の課題を基に保護者の要望を踏まえ、次の二つの指導方針を設定した。

- ① 担任との関係を深め、興味・関心を広げるとともに、やり取りを楽しむことができるようにする。

まず、学校で一番身近な存在である担任が、本児との共感関係を深め、本児が自分の気持ちを十分に伝えることができるような存在になることが大切であると考えた。そこで、本児の好きな遊びを一緒にしたり、同じ体験をしたりするような「並ぶ関係」から、アプローチしていくことにした。そうして、次第に興味・関心を広げながら、いろいろなものとかかわらせた。そうするなかで楽しい体験を重ね、伝えたい、話したいという気持ちを高めることができると思われる。また、体験を共にすることで同じ話題でやり取りすることができ、「やりとりの関係」を深めることにつながるのではないかと考える。

- ② サインをはじめとして伝える手段を身に付けることができるようにする。

自分の気持ちを伝えるためには、それを表す手段を身に付けなければならない。本児が入学してからサイン指導を行ったところ、すぐに覚えて使う様子があったり、自分でサインを考えて表現したりといった場面が見られたことから、サイン指導が本児にとって有効であると考えた。そこで、日常生活に即した場面で、本児のできる動きを考慮しながらサイン指導を行っていくことにした。サイン指導では、家庭や学校の日常生活で必要とするサインとして、学習に関するサインや「トイレ」のサイン、「いや」のサインをはじめ気持ちを表すサイン、本児の好きな遊びを表現するサインを中心に指導を行うことにした。また、本児がサイン指導の際によく見ていることから、サイン指導を進めながら注意の持続をねらうとともに、本児のできる動きを考慮しながら、不可視的な動きや左右分離の動きのあるサインを模倣できるようにするといった「模倣する力」の指導も行っていきたい。本児の話したいことを伝えるためには、サインと併せて、写真カードなども取り入れ、本児にとって伝えやすい手段から、次第にサインに替えていったり、本児の名前カードを手掛かりに平仮名の文字につなげたりと「符号化する」ことを行いながら、サイン、文字といった伝達手段を習得することができるようにしていきたい。これらの指導に当たっては、連絡帳で知らせ合ったり、登下校時に話をしたりして家庭と連携しながら進めていきたいと考える。

(3) 具体的な指導について

指導方針を踏まえて、具体的に指導していきたいことは次のようである。（＝学部目標）

- 興味・関心のある遊びや活動を一緒にしたり、いろいろな話題でやり取りしたりして、教師や友達と楽しくかかわり合うことができるようにする。

- ・ 「並ぶ関係」を深める

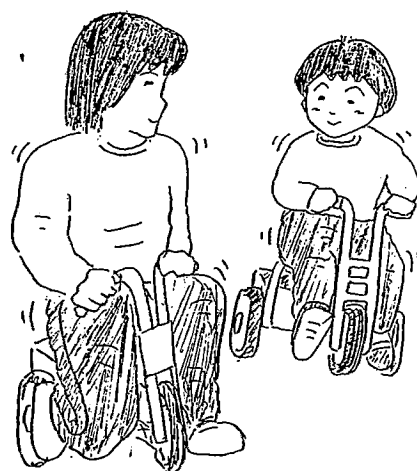
本児の好きな遊びを一緒にしたり、本児の好きな遊具の写真カードを一緒に見たりして、お互いが楽しいと感じ合えるような関係を目指す。

- ・ 経験したことを伝え、話題を広げる

一緒に遊んだことを指さしや写真カード、サインで表し、経験したことを伝えることができるようにしていくとともに家庭と連携することで学校、家庭で共通した話題でやり取りし、話題を広げられるようにする。

- ・ 「先生」「自転車」「ぶらんこ」「遊ぶ」のサインの習得

本児が指さしなどで話し掛けてきたときには、それを表すサインで返してサインの形態を教えていくようにする。



本児の好きな自転車で遊び
「並ぶ関係」を深める

家庭や学校の日常生活で必要とするサインを習得するとともに、自分の気持ちを相手に伝えられるようにする。

- ・ 授業での号令のサインを習得する

教科名のサインは本児のできる動きであるので、「○○(教科)」「勉強」「始めます」「終わります」という号令をみんなで行い、模倣を促すようにするとともに、それらのサインを使うことができるようにする。

- ・ 「トイレ」、「いや」のサインを使う

「トイレ」「いや」のサインについては、サインの形態を覚えるだけでなく、適切な場面で使っていくことができるようにするために、機会をとらえて指導していく。



授業の号令をよく見て模倣する

平仮名カードを並べて自分の名前を作ったり、平仮名のなぞり書きをしたりすることができるようにする。

- ・ 自分の名前カードを選ぶ

係の仕事で、当番の名前カード選びをしながら、自分の名前を呼ばれたら、確実に自分の名前を選ぶことができるようにする。

- ・ 自分の名前と平仮名が結び付くようにする平仮名カードを並べ換えて自分の名前を作る活動をし、名前カードを平仮名一文字ずつに分化したり、教師が言った平仮名カードを取ったりして符号化できるようにする。

- ・ 文字指導につなげる

平仮名カードを並べて自分の名前を作ったり、簡単ななぞり書きをしたりして、平仮名の読み書きの指導を行う。



写真カードを手掛かりに平仮名を並べ換え、名前を作る

4 指導目標 平成8年度3学期 [第1期]

《学校卒業目標》

《学部卒業目標》

《学年修了目標（学期目標）》

サインやことばを使って相手に自分の気持ちを伝えたり、相手からの話し掛けに答えたりすることができるようにする。

興味・関心のある遊びや活動を一緒にしたり、いろんな話題でやり取りして、教師や友達と楽しくかかわり合うことができるようにする。

家庭や学校の日常生活で必要とするサインを習得するとともに、自分の気持ちを相手に伝えられるようにする。

平仮名カードを並べて自分の名前を作ったり、平仮名のなぞり書きをしたりすることができるようにする。

● 興味ある話題で話し掛けてきたり、一緒に遊ぼうと誘いにきたりすることができる。
(手を引く、指さし、ジェスチャー、発声などで、1日に1回以上)

● 感覚の時間に、教師をよく見ながら身体の各部位を触る動作模倣（両側性のもの）をすることができる。

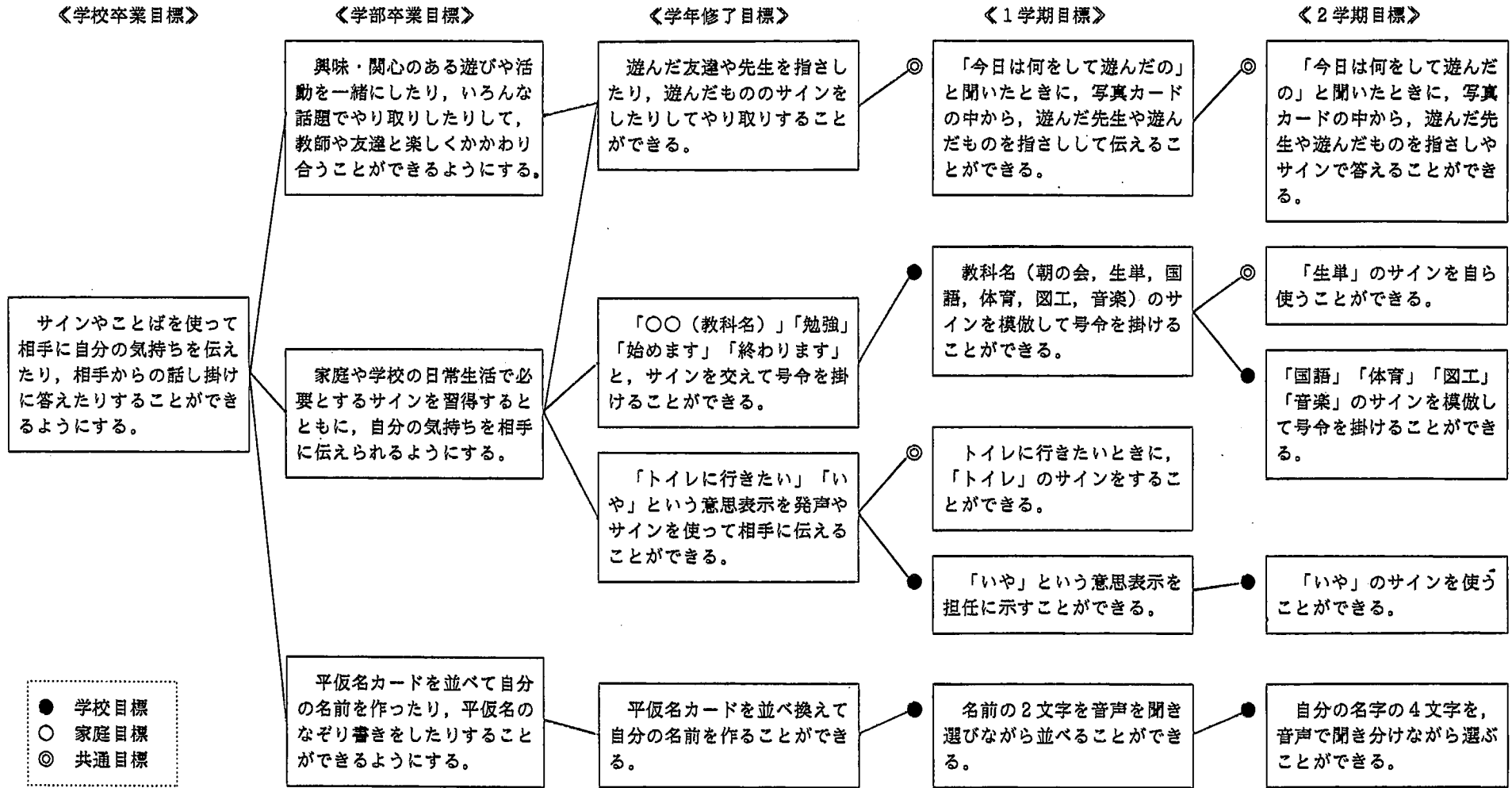
● 「〇〇（教科）」「勉強」「始めます」「終わります」と、教師を模倣しながら発声とともにサインを交えて号令を掛けることができる。

◎ トイレに行くときに、教師や母親と一緒にトイレのサインをすることができる。

● 係の仕事（当番調べ）の際、平仮名で書かれた6人の名前カードの中から、自分の名前カードを選ぶことができる。

- 学校目標
- 家庭目標
- ◎ 共通目標

指導目標 平成9年度1～2学期 [第2～3期]



5 指導内容及び指導の経過①

| | | | |
|------|--|---|--|
| 学部目標 | 興味・関心のある遊びや活動を一緒にしたり、いろいろな話題でやり取りしたりして、教師や友達と楽しくかかわり合うことができる。 | | |
| 学年目標 | 遊んだ友達や先生を指さしたり、遊んだもののサインをしたりしてやり取りすることができる。 | | |
| 学期目標 | 1 期 (平成8年度3学期) | 2 期 (平成9年度1学期) | 3 期 (平成9年度2学期) |
| | 興味ある話題で話し掛けてきたり、一緒に遊ぼうと誘いにきたりすることができる。 | 「今日は何をして遊んだの」と聞いたときに、写真カードの中から、遊んだ先生や遊んだものを指さして伝えることができる。 | 「今日は何をして遊んだの」と聞いたときに、写真カードの中から、遊んだ先生や遊んだものを指さしたり、サインで表したりして答えることができる。 |
| 指導内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本児の好きな遊びを一緒にしたり、本児からのかかわりに応えたりし、本児の気持ちに添うように働き掛ける。 ○ 本児からの話し掛けに言葉やサインで答えながら、関連のある話をこちらから投げ掛けて話題を広げるとともに、一緒に活動する機会を多くし、共通の話題でやり取りするようにする。 ○ 本児が手を引いたり指さしたりした時には、「○○で遊ぶの？」と言葉掛けしたり、「先生」「自転車」についてはサインで返すようにし、形態を覚えることができるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 同じ学級の教師や友達の写真カード、プレイルームやプレイヤーの遊具の写真カードを教室の身近な所に置いておく。 ○ 休み時間に遊ぶ前に、「何をしようか」と聞きながら、写真カードを指さすように促す。 ○ 学校では、帰りの会や行事のときに、「今日は何をして遊んだの？」と聞き、写真カードで遊んだ先生や遊具を指さしさせるとともに、「自転車」「ぶらんどんこ」についてはサインを教え、模倣を促すようにする。家庭でも同様に写真カードを指さして伝えることができるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本児が持ってきた写真カードを見て、「△△と遊ぶの？」「○○で遊ぶの？」など言葉掛けするとともに、「○○(遊具)」や「遊ぶ」についてはサインでも表し、模倣を促すようにする。 ○ 帰りの会では、写真カードで「△△と○○で遊んだ」と発表した後に、「○○のサインはどうするの？」というような言葉掛けをし、遊んだものをサインで表すことができるようにする。また、家庭でもできるだけサインを使うことに取り組んでもらう。 |
| 指導経過 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本児の気持ちに添うように言葉掛けをしたり、本児と一緒に遊ぶようにしたりするうちに、遊びたいときには「あっあ」と大きな声で呼び掛けてくるようになった。 ・ 話題については、「洗髪について」が全くなくなり、新たに「父親に電話する」「歩いて神社にお参りに行く」が加わった。学校での出来事を遊んだことを話題にすることは少なくなかった。ほとんど遊びの誘いは、指さしや手を引く様子が見られなかったが、「先生」のサインは覚え、使うことができるようになった。 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 休み時間に担任の写真カードを持って来て担任の顔と交互に指さしたり、遊具のカードを持ってきて誘ったりする様子が見られるようになった。 ・ 帰りの会では、遊んだ遊具を指さしするようになったが、遊んだ先生についてははっきりしなかった。 <p>【家庭での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「今日は何をして遊んだの」の質問に、「自転車」や「プール」のサインを使って答えることがあった。 ・ 「○○に行きたい」ということを伝える時に、その場所の写真やその場所を表すものを使って伝える様子があった。 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 写真カードよりも、「遊ぶ」「自転車」のサインで「自転車で遊びたい」ことを伝えることが多くなった。 ・ チューブブランコに興味を示し遊ぶことが多くなり、こいでのほいとき大きな声で担任を呼びたい様子が見られるようになった。また「ぶらんどんこ」のサインを覚えることができた。 <p>【家庭での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭でもチューブブランコの写真カードを指さすことが多くなり、学校で遊びたいというように伝えるようになった。また、友達の写真カードを指さしながら「△△さんは車に乗る」ということをお母さんに教えたり、一緒にバスに乗る友達を教えたりするようになった。 |
| 評価 | A | C | A |
| 考察 | <p>本児の好きな遊具と一緒に遊ぶうちに、担任との「並ぶ関係」が深まってきた。「自転車」については、本児の方から使えようとする様子が見られた。指さしや手を引く様子でも、他場面でも何となく使えようとする様子が見られた。指さしや手を引く様子でも、他場面でも何となく使えようとする様子が見られた。指さしや手を引く様子でも、他場面でも何となく使えようとする様子が見られた。</p> | <p>写真カードを指さして伝えることができた。本児の喜びも大きかった。写真カードを使うようになった。本児の喜びも大きかった。写真カードを使うようになった。本児の喜びも大きかった。</p> | <p>自分の遊びたい気持ちも、それを積極的に伝えようとするようになった。これは、担任との関係が深まってきたことによるものと考えられる。また、友達の写真カードを指さしながら「△△さんは車に乗る」ということをお母さんに教えたり、一緒にバスに乗る友達を教えたりするようになった。</p> |

指導内容及び指導の経過②

| | | | |
|------|---|--|---|
| 学部目標 | 家庭や学校の日常生活で必要とするサインを習得するとともに、自分の気持ちを相手に伝えられるようにする。 | | |
| 学年目標 | 「〇〇（教科名）」「勉強」「始めます」「終わります」と、サインを交えて号令を掛けることができる。 | | |
| 学期目標 | 1 期（平成8年度3学期） | 2 期（平成9年度1学期） | 3 期（平成9年度2学期） |
| | 「〇〇（教科名）」「勉強」「始めます」「終わります」と、教師を模倣しながら発声とともにサインを交えて号令を掛けることができる。 | 教科名（朝の会、生単、国語、体育、図工、音楽）のサインを模倣して号令を掛けることができる。 | 国語、体育、図工、音楽のサインを模倣して号令を掛けることができる。 |
| 指導内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本児が前にいる教師をよく見ているかを確認しながら、ゆっくり大きな動作でサインを示すと同時に、言葉も添える。 ○ 本児のサインの動作や発声を確認しながら進めるとともに、本児からの動作も待つようにし、次第にサインを習得できるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本児が前にいる教師をよく見ているかを確認しながら、特に「朝」、「会」などは動作の違いが分かるようにゆっくり大きな動作でサインを示すと同時に、言葉も添える。 ○ 本児のサインの動作や発声を確認しながら進められるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 「図工は絵をかくからこうするんだよ」「音楽は歌を歌うようにするんだよ」というようにイメージしやすくするような言葉掛けを行っていく。 ○ 国語、体育については、本児が自分で考えてサインで表すのを待ってからみんなで一緒にするようにする。 |
| 指導経過 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科名のサインについては、本児のできる動きであるものの、「朝」と「会」など似ている動作のサインや、不可視的な動きのサインは模倣することが難しかった。 ・ 「勉強」「始めます」「終わります」についてはサインの形態を覚え、模倣しなくてもできるようになった。 ・ 発声については語尾の部分で「あっ」という小さな声を出していたが、言葉掛けがなければサインだけで終わらせることが多かった。 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科名のサインについては、「朝の会」を表すときに、「朝」と「会」という似ている動作を本児なりに区別して表すことができるようになってきた。 ・ 「生単」のサインの形態を覚え、号令の際には教師が示さなくても自分ですることができた。 ・ 「国語」や「体育」のサインについては「本」や「走る」といった動作ができることから、模倣しやすい様子であった。 ・ 「図工」「音楽」などは模倣しにくい様子であった。 | <p>【学校での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「国語」「体育」のサインの形態を覚え、「国語のサインはどうするの」と聞かれたときにはサインで表すことができた。 ・ 「図工」「音楽」のサインについても、担任を見ながら模倣しようとし、手を動かすような動きは見られたが、その動きをはっきりとイメージできるまではいかなかった。 <p>【家庭での取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2期でサインの形態を覚えた「生単」のサインを頻繁にお母さんに見せるとともに、その日にした活動を動作で表すという報告があった。 |
| 難 | C | C | B |
| 考察 | 授業の始まりと終わりの号令は、学校でサインを教えていく機会として設定しやすく、児童の目に多く触れることができたと考えられる。そのため、他の児童も覚えることができ、友達と一緒にすることで、本児の注意の喚起がしやすかった。教科名のサインが不十分であったので、2期ではそれを中心に目標に取り上げることにした。 | 本児なりに「朝」と「会」の区別をするようになるなど、サインが分化してきた様子がうかがえる。「生単」は不可視的な動作であるが、繰り返し模倣するうちにできるようになっている。「図工」「音楽」は、本児にとっては動きが難しかったこともあるが、「国語」や「体育」に比べて、サインの動作をイメージしにくかったのではないかと考える。 | 2期で形態を覚えたサインについては、自ら使うようになり、模倣することが難しかったサインもその動作をイメージさせるようにしたことで、少しずつ模倣できるようになっている。「生単」については、家庭で自ら頻繁に使うという報告から、本児にとって生単の授業が楽しいものであり、それを伝えたいという意欲が高まってきたのではないかとと思われる。 |

指導内容及び指導の経過③

| | | | |
|------|---|---|---|
| 学部目標 | 平仮名カードを並べて自分の名前を作ったり、平仮名のなぞり書きをしたりすることができるようにする。 | | |
| 学年目標 | 平仮名カードを並べ換えて自分の名前を作ることができる。 | | |
| 学期目標 | 1 期 (平成8年度3学期) | 2 期 (平成9年度1学期) | 3 期 (平成9年度2学期) |
| | 係の仕事(当番調べ)の際、平仮名で書かれた8人の名前カードの中から、自分の名前カードを選ぶことができる。 | 名前の2文字を音声聞き、選びながら並べることができる。 | 自分の名字の4文字を、音声で聞き分けながら選ぶことができる。 |
| 指導内容 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 当番のカードを移動させて、担任と「今日の当番は○○さんだね」というやり取りをし、名前を確認する。 ○ 当番になった自分や友達の写真カードを選ばせる。 ○ 平仮名で書かれた名前カードの中から当番の名前カードを選ばせる。(選ぶ枚数を次第に増やしていく。) | <ul style="list-style-type: none"> ○ 名前の2文字を書いたカードを見せ、一緒に指さしをしながら「○○」と読む。 ○ 次に平仮名1文字ずつに切ったカードを見せ、名前の2文字を書いたカードとマッチングさせながら並べるように指示する。 ○ マッチングができれば、「○○さんの○をちょうだい」と言葉掛けして、平仮名1文字ずつ担任に手渡してもらおう。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 本児の写真カードの下に名字の4文字を書き、それを1文字ずつ4つに切ったものを並べ換えるようにする。 ○ 写真カードを手掛かりに並べることができるようになったら、今度は写真カードを除き、名字を書いた名前カードの下に平仮名1文字をマッチングするようにして並べるようにする。 ○ マッチングができるようになったら、見本のカードを取り除き、教師の言葉で1文字ずつを並べるようにする。 |
| 指導経過 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 当番のカードを移動させ、担任が「今日の当番は○○さんだね」と言うと、その友達や自分を指さしてうなずくというようなやり取りをすることができた。 ・ 写真カードは確実に選ぶことができた。 ・ 名前カードは自分のものは確実に選ぶことができた。友達の名前カードは、同じ文字の多い名前カードは難しい様子であった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 初めは、読んだカードの下に同じように並べることが理解できていない様子だったが、繰り返すうちに理解し、並べることができるようになった。 ・ 担任が指示した平仮名1文字ずつを手渡すことができるようになった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 名字の4文字は文字カードだけでは並べるのが難しい様子であり、本児の写真カードと共に分割したものを並べ換えることで、同時に名字を並べ換えることはできた。 ・ 写真カードの手掛かりがない状態では、四つの文字を並べ換えるのは難しかった。マッチングをするように見本を指示し、1文字ずつ手渡すと並べることができた。 |
| 難 | A | A | C |
| 考察 | 当番のカードを選ぶ活動ができることから、本児の中に友達をはっきりイメージしていることが分かる。似ている名前の友達のカードを間違えることがあったことから平仮名を読むことができるわけではなく、形として認識している状態であることが分かる。 | 名前の2文字については、二つの文字から選べば良いので、選択の幅が狭く、選びやすかったのではないかと考える。名字の4文字については、初めは写真カードなどの手掛かりを用意して行う必要があると思われる。 | 名字の4文字は名前に比べて選択の幅が広がり、難しい課題であった。名前カードを選べることから「符号化する」ことができる段階にはあるが、絵カードや具体物を使った指導をまだ十分に行う必要があると思われる。 |

6 考察とまとめ（実践資料8～10参照）

目標についての考察と日常の本児の様子を基に、二つの指導方針の視点から考察していきたい。

(1) 1期の全体考察

<指導方針①に関して>

本児の好きな遊びを一緒にしたり、活動を共にしたりするうちに、本児の方からの働き掛けが多くなったことから、「並ぶ関係」が深まったと考えられる。しかし、本児からの話題が少し広がったものの、父親のことや散歩のことなど家庭での話が多く、学校で遊んだことや勉強したことについての話題が少ないことから、もっと担任との関係を深めるとともに、話題を共有する必要があると思われた。

<指導方針②に関して>

サインの習得に関しては、本児の日常生活に関連のあるものが定着し、それを会話の中で使う様子が多く見られた。また、「トイレ」のサインを表すことが多くなってきたが、びっくりしたときにその場から逃げる手段として使う場面も多く、トイレに行きたいときに表すとは限らなかったようである。家庭では「お願い」や「いや」というような気持ちを表すサインをよく使うということであったが、学校ではほとんど見ることができなかつたことから、まだ担任には十分に気持ちを伝えられていない状態であったと考えられる。授業の号令を掛けるときに使うサインは教師の方をよく見て模倣することができており、サインを模倣することで「見る」ことや「模倣する力」の指導をしていくことは、本児にとって有効であったと思われる。しかし、「朝」と「会」のサインを同じように表してしまうというように、その二つの違いに気付かずに模倣している様子が見られ、この段階では、サインの違いに「気付く」ことができていないといえることができる。

(2) 2期の全体考察

<指導方針①に関して>

2期では、写真カードを使って、遊びたい遊具や担任の写真カードを指さして伝える指導を行った。すると、自分から写真カードを持ってきて見せ「これで遊びたい」というような要求を伝える場面が多くなったり、家庭でも同じように行きたい場所を写真を持ってきて要求するということが見られるようになってきたり、自分の言いたいことを伝える場面が増えてきた。また、家庭でも学校のことを話題にしてもらうことで、共通した話題でやり取りすることができ、話題を広げるきっかけになったようであった。そのほか、担任とのやり取りの中で、本児が「わたし」「バス」というサインで話し掛けてきたときに、「先生」「車」のサインをして見せ、「先生は車で来るんだよ。」と言ったところ、その後、「わたし」「バス」「先生」「車」というように話の内容が広がる様子が見られ、担任との関係の高まりとともに、一方的でなく相手を意識し、相手と話を共有できるようになったことがうかがわれる。

<指導方針②に関して>

サインの習得状況を見てみると、1期では本児の日常生活に関することや家庭に関することを表すものが多かったが、2期では、「自転車」や「プール」（体育での水泳）、「おふろ」「寝る」（宿泊学習）など、学校での遊びや学習に関するサインも使う様子が見られるようになってきた。これらのサインは、家庭でも使うことのできるものであると同時に、本児にとっ

て興味のあるものであったので、すぐに覚えることができたのではないかと考えられる。また、「いや」のサインに関しては、担任にもそのサインをして見せることは少なかったが、給食で嫌いなものがあったときに、「食べきれない」というように差し出すといったことがあるなど、本児の気持ちを表す場面が見られるようになってきた。学習に関するサインでは、「朝」と「会」を本児なりに区別をして表すようになってきたり、生単のサインの形態を覚えたりと、サインをよく見て「気付く」ことができるようになってきたとともに、不可視的な動作のサインを模倣できるようになっている。また、名前の文字カードを確実に並べられることから「符号化する」ことの高まりがうかがわれ、言葉とサインを結び付ける力につながっているのではないかと考えられる。

(3) 3期の全体考察

<指導方針①に関して>

3期では、サインで「遊ぶ」「自転車」（自転車で遊びたい）と伝えるなど、担任に自分の要求を積極的に伝えることが多くなった。そして、遊んだ先生を指さしで教えるようになってきたとともに、家庭での出来事をサインで答えたりと、経験したことを伝えられるようになってきた。このように、経験したことを相手に伝えるという学習を繰り返したことで、本児とのやり取りが続くようになり、「やりとりの関係」も深まってきたと思われる。また、チューブブランコに興味を示して遊ぶようになるなど、担任と遊ぶ中で少しずつ興味・関心が広がってきた。それとともに、やり取りの場面では、「先生」「車」に続き、友達を指さし、「〇〇ちゃんも車」というように話す内容が友達のことへと広がってきた。このことから、本児がやり取りする楽しさを感じていることを察することができる。

<指導方針②に関して>

サインの習得状況では、「自転車」、「一緒に」など、2期で形態を覚えたサインは自分から使うようになり、模倣で表していた「ぶらんこ」の形態を覚えるという様子が見られている。また、「遊ぶ」、「いっぱい」、「お願い」など本児の要求（気持ち）を表すサインを覚え、自分から使って担任に訴えるというように、担任との関係の深まりとともに自分の要求を伝えるサインを習得した様子が見られる。学習のサインに関しては、「生単」のサインを習得し、家庭で頻繁に使うようになったということであったが、授業で繰り返し形態を教えたことと、家庭でも取り組んでもらったこと、また生単の学習が本児にとって興味のある活動であり、楽しい体験を伝えたいという意欲が高まったことが、サインの習得につながったのではないかと考えられる。また、本児にとっては、学習の活動のイメージとサインの動作が結び付きやすいもの（「国語」は本を開く動作、「体育」は走る動作）が覚えやすかったようであり、サインの習得については、よく見てサインを模倣することのほかに、「イメージする力」とも関連すると言えるようである。そして、本児なりに学習の活動をイメージできていることがサインの習得につながっていると考えられる。



チューブぶらんこで一緒に遊ぶ様子。

(4) ま と め

以上のような考察をまとめると、本児の指導については次のようなことがいえるのではないかと考える。

- ・ アセスメントから、本児との関係作りの中で「並ぶ関係」を充実させることを考えて取り組んできたことで、本児との関係が深まるとともに、担任との共有する話題でやり取りができるようになるなど、相手を意識したかわりができるようになった。また、友達に関しての話題も少しずつできるようになるなど、友達への関心も高まった。
- ・ サインの習得については、授業の号令を掛けるときに取り組んだサインは、本児の「注意する力」や「模倣する力」を高めることにつながった。本児にとっては、学習の活動のイメージとサインの動作が結び付きやすいものがサイン習得につながりやすいようであり、「イメージする力」とも密接に関係があることを思わせた。その意味からも、名前カードを手掛かりに進めた「符号化する」こと（「符号化する」ことは、「イメージする力」の高い段階である）の指導がサイン習得にもつながったのではないかと考える。
- ・ 担任との関係の深まりとともに、担任に要求を表すサインを使うようになってきたが、指導方針や目標の中でねらっていた「いや」や「トイレ」のサインは自分から使えるものの、適した場面で使うという点ではまだ不十分であった。このことから、もっと担任との関係を深め、本児が気持ちを十分に表せるようにするとともに、本児の気持ちをこちらが読み取るように努め、機会を逃さないようにして指導していく必要があると思われる。
- ・ 家庭と連携して進めてきたことは、学校と家庭で共通した話題でやり取りすることができたという利点とともに、本児の伝えたいことをあらかじめ知っておき、本児のサインを読み取り気持ちを十分にくみ取ることができたという点でも、やり取りの喜びに通じ、「やりとりの関係」を深めることにつながったと考えられる。

このような取り組みを行うことで、本児の伝えたいことを表す手段としてサインを新しく習得するとともに、やり取りが続くようになり、話題が広がったり、豊かにやり取りする様子が見られるようになった。今後もこのような指導を継続して行うことで、今後かわる相手とも、自分の気持ちを伝えたり、相手からの話し掛けにこたえたりすることができるようになるであろうと考える。

7 今後の課題

アセスメントで本児の状態像を把握するとともに、「子供や保護者の意見を聞く会」により、本児の課題が明確になり、指導を進めることができたが、目標に関しては、評価がしにくかったり、高い評価が出ていなかったりすることから適切であったとはいええないものもあった。また、サイン指導を行う中で認知的機能高めるという方針であったが、もっと個別指導場を増やして認知的機能高め指導をする必要があったのではないかと考える。本児にとってはサインという手段が有効であることが分かったが、今後は学部卒業目標にも挙げられているなぞり書きにも取り組むなどして、本児にとって有効な伝達手段を探っていければと考える。

【事例Ⅲ】 サインを用いて、かかわりの対象や話題を広げていくことを目指した
N. Y児の指導

1 対象児の概要（初期アセスメント結果から）

(1) 対象児 N. Y (男) 高等部3年 CA: 18歳10か月 (平成10年1月30日現在)

(2) 家族構成 両親, 妹 (高2, 中3)

(3) 生育歴

- ・ 妊娠中: 流産しかけたため服薬, 注射
- ・ 出産時: 正常分娩, 強い黄だん
- ・ 乳幼児期: 離乳 10か月 座り 1歳6か月
首のすわり 6か月 一人歩き 3歳3か月
はう 1歳6か月 始語 2歳3か月

(4) 教育歴

- ・ M病院 (7か月~2歳5か月)
- ・ H学園 (4歳~6歳)
- ・ 本校小学部 (昭和61年4月入学)
- ・ 本校中学部 (平成4年4月入学)

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 IQ: 13 MA: 2: 2 (平成8年5月実施)
- ・ S-M社会生活能力検査 SQ: 18 SA: 2: 7 (平成6年11月実施)

| 身辺自立 | 移動 | 作業 | 意思交換 | 集団参加 | 自己統制 |
|-------|-------|------|------|------|------|
| 2: 10 | 2: 11 | 2: 9 | 1: 8 | 2: 2 | 3: 6 |

(6) 身体機能について

日常生活に特に支障はないが, 柔軟性, 平衡感覚, 筋力がやや劣る。はしをうまく握れず, かき込むようにして食べたりボタンがうまく掛けられなかったりなど, 手指の巧み性や目と手の協応動作が十分高まっていない。

(7) 行動の様子

一人であちこち教室を訪問しては, 教師とのかかわりを楽しんでいる。友達とのかかわりや遊具で遊ぶことは少ない。要求が思うように伝わらなかったり, やりたいことを規制されたりすると, 近くにいる人の髪や襟を引っ張ったり, 物を投げたりすることがある。

(8) コミュニケーション

○ 人やものとのかかわりに関して (実践資料II参照)

本児は, 家庭においては母親を中心に家族の人に対して, 要求内容は限られ, パターン化している (買い物, おもちゃの購入, ビデオ, 帽子など) もの, 自分から本児独自のサインやなん語で伝えてきたり, これまでに印象深かった行事について伝えてきたりなど人とのかかわりはよく見られる。例えば, ミニカーのタイヤなどを外して父親にミニカーを要求したり, ビデオで出てきた先生や友達などについて名前を言ってもらって確認したり, わざと帽子を外に投げたり, 電灯のスイッチを入れたり切ったりするなど大人とのかかわりを楽しんでいるところがある。また母親との間では, アルバム (写真) を持ってきて母親と一緒に

見ながら、母親の質問に答えたり、自分から写真の教師を指さして母親に名前を聞いたりなどすることから、「並ぶ関係」や「提示の関係」にあると考えられる。

学校においてはトイレ、水飲みなどの要求を自分からサインで伝える以外は、M先生との養・訓を行いたいことを単発的なサインで要求してくることが多い。そのほかは、特定の教師に対して特定の話題（休日、バレエ、たばこ、時計など）をサインやなん語でかわりを求めてくることが多く、その話を聞くことができれば満足してしまうところがある。また、休み時間などは校内を探索して回り、それぞれの場所で教師とのかかわりを楽しむ一方、一人で自転車に乗ったり、リヤカーを押したりして遊ぶことも多く、ものを介しての「提示の関係」や「やりとりの関係」はあまり見られない。また、友達や特定の話題がない教師とは、自分からかわることはほとんど見られないなど「並ぶ関係」も希薄な面がある。

○ 認知的機能に関して（実践資料12参照）

「注意する力」

ものの用途に応じた扱い方ができたり、友達に連絡帳を配ることができたりするなど「弁別する」段階まで至っている。ただ日常生活の場面では、食器の片付けの際、食器を違う食器の上に重ねようとしたり、はしを逆さまに使ったり、靴を反対に履いたり、体育服などを前後、表裏反対に着ようとしたりする。注意を促すと食器やはしはよく見てやり直すことがあるが、靴や服については注意を受けてやり直しをするものの、よく見ないで行うことが多い。このようなことから「弁別する」段階まで至っているものの十分にその力を発揮できていない面があり、課題場面を設定し、理解しやすい条件など整えれば力を発揮できる可能性は高いと思われる。

「イメージする力」

身近な事物の名称、教師や友達の名前などを聞いて、その具体物や写真カードを取ることができたり、伝えたい内容を本児独自のサインでいくつか伝えることができたりするなど「符号化する」段階に至っているといえる。

「見通す力」

自分の好きなミニカーや動物のミニチュアなどを集めてひとまとめにして振ってその感触を楽しんだり、ミニカーで遊んだりなど特定のものへの関心は高く、「ものへ向かう」ことはあるものの、目と手の協応動作が十分確立していないために思う存分ものへの働き掛けができない状況にある。しかし、電池で動くミニカーを走らせたり、高い所に置いているおもちゃをいすに乗って取ったりすることから「洞察する」段階まで至っているといえる。また、週末になると、土曜日のバレエの話や休日の過ごし方の話題が多くなるなど自分の生活に関する見通しも持てるところも見られる。

「模倣する力」

目と手の協応が十分でなく、また身体全体が硬いため、思うような模倣ができない。特に指を動かしたり体を曲げたりする動きは苦手である。日常よく目にする簡単な身振りなどはどうにか模倣できるものの、こちらから示すサインについては、正確に模倣できずに、また、できる動きも限られていることからサインも似通ったものになりやすい。ラジオ体操などでは、不可視的な動きの一部を自分独自の身振りで行うことができる。模倣遊びに対する興味があまりないが、形態を覚えたサインを使用できることから「覚えた動きを模倣する」段階に至っているといえる。

○ サインに関して（実践資料13・14参照）

手指の分化が不十分なため、複雑な動きを伴うサインの習得は難しく、本児のできる動きで独自のサインを使うことが多い。ただし、なん語との組み合わせにより表出語（サイン+なん語）は多い。理解語も多く、サインと言葉で、指示されたことはよく理解できる。

家庭では、一日または一週間の流れで、帰宅後の過ごし方（ビデオ、買い物、集会への参加、おもちゃの購入、帽子の要求など）や休日の過ごし方（買い物、田舎への帰省、プールなど）についての要求行動が多く見られ、本児独自のサインやなん語を使って伝えてくることが多い。ときには、母親の言葉に合わせてサインやなん語を組み合わせる（プールに行きたい、買い物に行きたいなど）もある。

学校では、本児と共感関係の持てる特定の教師に対して、自分のしてほしい話（養・訓、ライター、眼鏡、時計など）や要求（養・訓、トイレ、更衣など）を本児独自のサインやなん語を使って伝えてくることが多い。その際、一語文的なかわりが多く、教師がこれまでの文脈を推測しながら繰り返し言葉やサインで補っていくことで本児の納得のいく話になるようである。しかし、独自のサインが多く、その内容が重複してお互いに分かりにくかったり、発音も不明りょうなものが多く伝わりにくかったりするため、こちらの受け取りが悪くなり、何度も聞き返してきたり、不思議そうな顔をしていたりすることもある。

(9) 本児の現在の課題

- 自分の興味のあるものへの執着が強く、その周囲にあるものに目を向けることが少ないために必然的に話題が限定されている。人とのかわりにおいても同じことがいえるが、加えて、話題を自ら選び（作り）、かわる人によって話題を固定させているためにかかわる対象が限定されている。

かわりの対象、話題を広げる。

- 自分の経験したこと、楽しみにしていること、今したいことなど伝えたい内容は多いものかわり手は限られている。また、自分の伝えたい内容に対して習得しているサインが少なく、伝わりにくい。

サインの分化を進め、新しい形態を覚える。

2 子供や保護者の考える将来の生活及び要望（子供や保護者の意見を聞く会より）

(1) 子供や保護者の考える将来の生活

父親の夢は、田舎に帰って畑と一緒に農作業をすることだが、卒業後は通所の施設で本児の好きな作業（運搬作業）を中心に生活できればと考えている。施設への入所は考えていない。

(2) 子供や保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 家庭では、サインがなくても本児が伝えようとしていることが大体分かるので、あまり積極的に使ってこなかった。しかし、本児の使うサインが増えて、話す内容が増えてくると分からないことも多くなってきた。新しく覚えたサインなど、教えてほしい。
- ・ 写真カードをつづったファイルもたまに利用しているので、サインだけでなく、絵や写

真を使った指導も継続してほしい。

イ その他に関する要望

- ・ やることがはっきりしていて、それが十分に伝わればできるので、朝の会などでいろいろな役割を与えてほしい。
- ・ 身辺処理の力を高めてほしい。

3 指導方針

(1) 本児の将来の生活について

家族（特に両親）との生活が中心になるが、進路先として考えている通所の施設も重要な生活の場となる。その際、本児がよりよく生活できるように懸念されることは、

- 衣服の着脱や排せつなど基本的な身辺処理が十分高まっていない。
- 自分からうまく話せなかったり、サインで伝えられることが少なかったりして、自分の気持ちを十分に相手に伝えられない。
- 周りの人の態度や環境に左右されやすく、自分の気持ちを十分に受け止めてもらえなかったり環境が変わったりすると情緒が不安定になりやすい。

というようなことである。

そこで、保護者の要望を次の二つの視点で整理し、課題の設定に生かすこととした。

新しいサイン、今後必要と思われるサイン等について学校と家庭と連携を十分にとること

サインだけでなく、かかわる人が誰でも分かるように写真カードなどを利用して話題を提供したり、要求したりできるようにすること

(2) 本児の現在の課題と将来の生活を考えて（学校・学部目標設定の考え方）

本児の将来の生活のことや保護者の要望、現在の課題なども踏まえて、今後の指導方針を以下の2点を目指すことで確認し、具体的な手立てを設定した。

- 興味の対象を広げ、いろいろな人とやり取りを楽しむことができるようにする。
- 必要となるサインを習得し、より分かりやすく相手に伝えることができるようにする。

このことにより卒業後の不安の多い環境にも比較的早く対応することができ、これまでのような環境の変化に伴う情緒の不安が軽減され、よき理解者が増え、見通しを持った生活が送れるのではないかと考える。

(3) 具体的な手立て

自分から伝えたいことを習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖の形で話すことができるようにする。

本児の興味・関心のある話題（養・訓、写真などに関すること）については、自分からよく伝えてくることから現在習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖で伝えられるようにする。また、毎日繰り返し行う係活動や授業のあいさつなどでもできるだけサイン連鎖の形で伝えられるようにしていきたい。その際、本児からのサインの表出を待ったり、出てきにくいときは、言葉やサインを添えたりしながら本児からのサインの表出を促すように配慮していくと

ともに、本校で用いている共通のサインが身体機能の関係から習得困難な場合、積極的に本児独自のサインを使い、表出語を増やすようにしたい。

次に、現在習得しているサインや話し言葉をより定着させるとともに、似通ったサインについては、できるだけ分かりやすいものに変えたり、サイン連鎖を促したりすることで本児の伝えたいことをはっきりさせていく。

最後に、毎日の様子について家庭と十分情報交換するなど連携を図りながら、本児からの単発的なサインに対して、順序立てたり、話題を広げたりなどサイン連鎖の形で返すことで、本児がサイン連鎖で伝えられることを増やしていきたいと考える。また、具体的な日常生活に関する写真や文字カードを日ごろ本児の目に付きやすい場所に掲示するなどして、機会あるごとに、音声とのマッチングなどを行い、本児の「符号化する」ことを高めていくようにする。そのことで、より理解語を増やしていき、その中から本児に必要なサインも本児の模倣可能な動きを中心に独自のサインとして指導していく。

教師や友達からの話し掛け（話題）に対して話を聞くことができ、相手からの話題（指示的なことも含めて）に対して、サイン（サイン連鎖も含めて）で応じることができるようにする。

本児は、自分の関心の高い話題では特定の教師に進んでかかわることができるが、そのかわりは一方的なことが多く、こちらの話題に応ずることが少なく、話を聞けないことが多い。そこで、本児からの話題については、これまでのように本児の要求を十分受け止めて話題を共有しながらも、その話題にかかわることについて尋ねたり、本児が関心の高いと思われる行事などのことを尋ねたりすることで、相手からの話題にも応じられるようにしていきたいと考える。

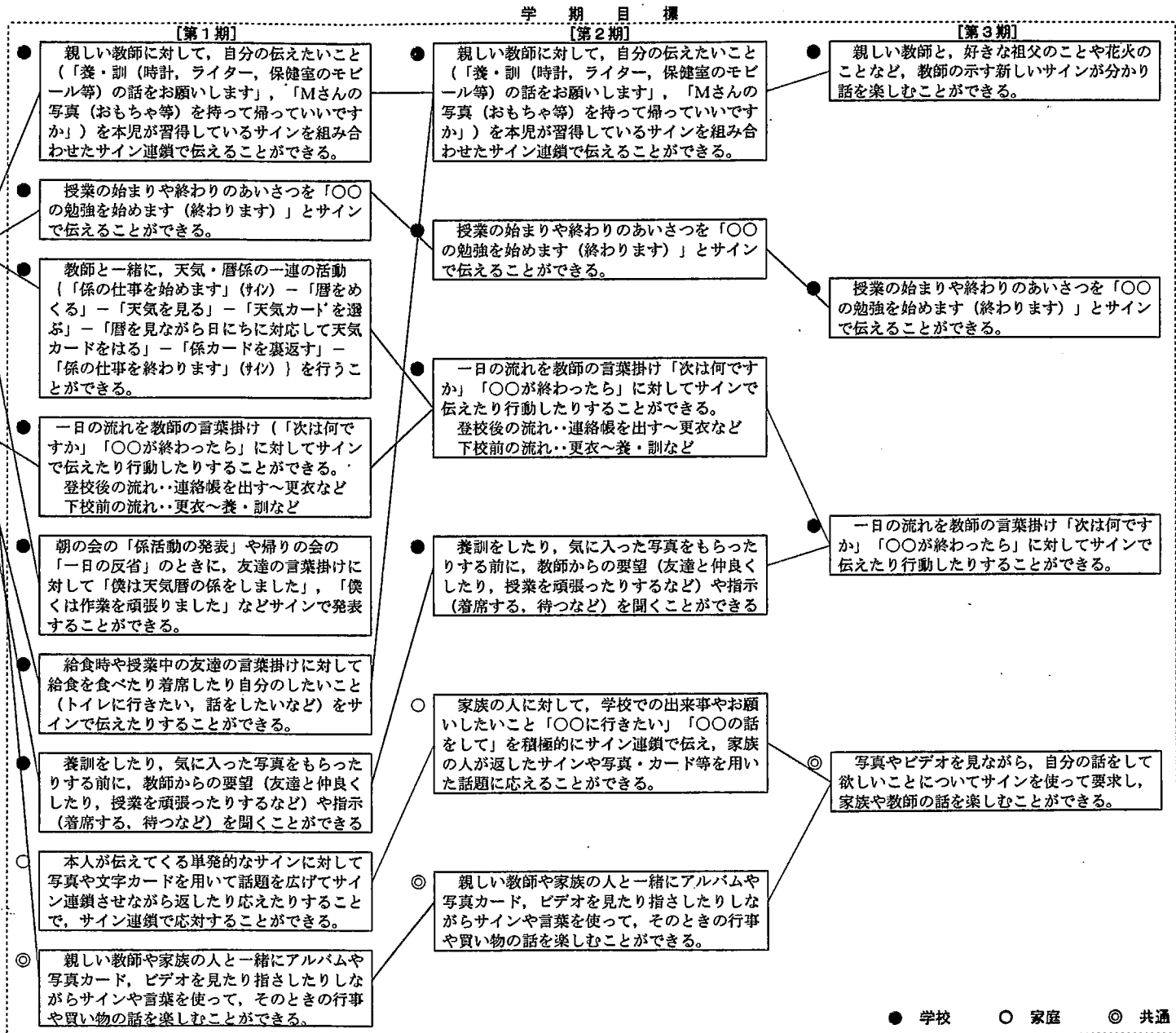
具体的には、本児は認知面の実態の中でも述べたように、相手の反応や結果を予測して行動を起こすことができる。そこで、本児が、好きな活動（養・訓、写真を見ることなど）をする前に、教師からの要望や指示されたことを聞くよう約束をさせることで、こちらからの話題にも関心を向けられるようにしていきたい。また、一日の生活の中で、登校後や下校前の流れは大体見通しを持って活動できつつあるので、その際、教師の言葉掛けに対して次の活動をサインで伝えられるようにしていきたいと考えている。そしてそのことを特定の教師だけでなく友達や他の教師にも広げ、いろいろな話題にも応じられるようにしていきたいと考える。

4 指導目標

学校卒業目標

自分から伝えたいことを習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖の形で話すことができるようにする。

教師や友達からの話し掛け(話題)に対して話を聴くことができ、相手からの話題(指示的なことも含めて)に対して、サイン(サイン連鎖も含めて)で自分の意図を伝えることができるようにする。



5 指導内容及び指導の経過①

| 学校学部 卒業目標 | 自分から伝えたいことを，習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖の形で話すことができるようにする。 | | |
|------------------|---|--|---|
| 学 期 目 標 | 第1期（平成8年度3学期） 親しい教師に対して，自分の伝えたいこと（「養訓（時計，ライター，保健室のモビール等）の話をお願いします」，「Mさんの写真（おもちゃ，ジャラ等）を持って帰っていいですか」）を本児が習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖で伝えることができる。 | 第2期（平成9年度1学期） 親しい教師に対して，自分の伝えたいこと（「養訓（時計，ライター，保健室のモビール等）の話をお願いします」，「Mさんの写真（おもちゃ，ジャラ等）を持って帰っていいですか」）を本児が習得しているサインを組み合わせたサイン連鎖で伝えることができる。 | 第3期（平成9年度2学期） 親しい教師との間で，好きな祖父の話や花火のことなどについて，教師の示す新しいサインが分かり，話を楽しむことができる。 |
| 指 導 内 容 | ○ 親しくかかわる教師の名前や話題にしたがるものや事柄についてのサインが確実にできるようにする。 ○ 「○○先生，△△のお話をお願いします」というサイン連鎖の形を理解させ，教師の言葉掛けに合わせてサインで伝えさせる。 | ○ 話をするとき教師側が言葉と一緒にサインを使うことで本児にも意識させる。 ○ 本児が使うサインの中で形態が似ているものについて，分化させる。 ○ 教師の言葉掛けに合わせて，サイン連鎖ができるようにする。 | ○ 写真カードなどを用いて話題に集中させ，その話題と，かかわる人などについての新しいサインについて慣れさせる。 ○ 既存の話題だけでなく，新しい話題に対しても積極的に楽しむことができるようにする。 |
| 指 導 経 過 | <ul style="list-style-type: none"> サイン連鎖の面では教師が言葉を添えたり少し待ったりすることで，本児から伝えられることが多くなってきた。 早く話をして欲しいために，決めたサインを簡略化したり，一部を省いたりしてしまうことが多く，伝わりにくいことがあった。 一言一言区切って，ゆっくりとサイン連鎖を促すと言葉に合わせてサインを出すことが多くなった。 親しい教師の名前や自分の好きな物など単発的なサインはよく出るようになった。 一人の教師の一つから三つくらいの話題を固定させており，違う教師が普段と違う話題に切り替えようとしても話題についてくることができなかった。 | <ul style="list-style-type: none"> 担任が替わり，話をして欲しいときの約束，「○○先生，△△のお話をお願いします。」というサイン（サイン連鎖）が十分できていなかったが，学期の後半は正確ではないが一人でできることが多くなってきた。 一つの言葉に一つのサインという決まりが分かりつつあり，教師の言葉掛けを受けてサインを訂正することも見られるようになった。 話をして欲しいときだけでなくそのほかの要求場面でも教師の言葉掛けに合わせてサイン連鎖で伝えようとするものがあつた。 親しくかかわることが多くなってきた教師を表すサインや既存の話題にサインを当てたものを模倣したり，新しい話題を表すサインをよく覚え，やり取りを楽しむ様子が見られるようになった。 | <ul style="list-style-type: none"> いくつかの新しいサインが定着しつつあるが一部の教師との間にとどまっている。 新しい話題よりは既存の話題で話をした方が楽しいという気持ちが強く，ほかの教師が話題を変えても答えることが少ない。 いろいろな教師に対して写真を指さし，写っている人や印象に残っているような事柄について話をしてもらうことに興味を示すようになった。 |
| 評価 | B | A | B |
| 考 察 | 本児の方からサイン連鎖で伝えてくることは少なく，ほとんど教師が本児の話したい話題を探り，言葉を掛け，それに合わせて本児がサインを出すパターンだった。自分から話題を絞って提供できるようにしたい。 | 初めの話題の提供はどうしても単発的なサインになってしまうが，教師側が促せば，言葉を添えなくてもサイン連鎖で要求できるようになってきた。伝えようとするサインが限られているので，今後，話題が広げられるようにしたい。 | 新しい話題よりは既存の話題を好む傾向が強いがそれでも，特定の教師との間では広がりが見られ，新しいサインもいくつか覚え，そのことについての話を求める様子も見られた。 |

指導内容及び指導の経過②

| | | | |
|------------------|---|---|--|
| 学校学部 卒業目標 | 教師や友達からの話し掛け（話題）に対して話を聞くことができ、相手からの話題（指示的なことも含めて）に対して、サイン（サイン連鎖も含めて）で、自分の意思を伝えることができる。 | | |
| 学 期 目 標 | 第1期（平成8年3学期） 一日の流れを教師の言葉掛け「次は何ですか」 「〇〇が終わったら・・・」に対してサインで伝えたり行動したりする事ができる。 | 第2期（平成9年1学期） 一日の流れを教師の言葉掛け「次は何ですか」 「〇〇が終わったら・・・」に対してサインで伝えたり行動したりする事ができる。 | 第3期（平成9年2学期） 一日の流れを教師の言葉掛け「次は何ですか」 「〇〇が終わったら・・・」に対してサインで伝えたり行動したりする事ができる。 |
| 指 導 内 容 | ○ 登校後（連絡帳提出－更衣－係の仕事）の流れ 下校前の流れ（更衣－帰りの会－養・訓の話－養・訓－下校）を定着させる。 ○ 連絡帳や鞆を指したり、更衣や養・訓など本児のできる動きからサインを作ったりして定着させる。 | ○ 登校後（連絡帳提出－更衣－係の仕事）の流れ 下校前の流れ（更衣－帰りの会－養・訓の話－養・訓－下校）を定着させる。 ○ 登下校時だけでなく、生活全般において更衣や養・訓などのサインを使って行動を促したり話題に取り上げたりする。 | ○ 親しい教師との間だけでなくいろいろな教師との間でも、大まかな一日の流れについて話を聞いたりサインで答えたりできるようにする。 ○ 毎日の登校後、下校前の流れを一本化し流れに沿った行動を促すようにする。 ○ 登下校時だけでなく、生活全般において更衣や養・訓などのサインを使って行動を促したり話題に取り上げたりする。 |
| 指 導 経 過 | <ul style="list-style-type: none"> 「次は〇〇だね」という言葉掛けに従って行動することが多くなってきたが、自分のやりたいことがあるときには、登下校時の流れに沿って促してもなかなか行動に移すことができなかった。 「更衣だね」「養・訓だね」というような教師のサインを併せて用いた言葉掛けに反応して話を進めたり、自分からもサインを示すことが多くなってきた。 更衣、係の仕事（カレンダーめくり）、養・訓（養・訓の話）、お話、お願い、親しい教師の名前などサインが定着した。 | <ul style="list-style-type: none"> 特に下校時の流れについては養・訓の話をして欲しいために、決められた流れに沿って行動することが多くなった。ほかの場面では、校長室や親しい教師のことが気になり、集中して取り組むことができなかった。 サインは、本児の身振りからサインの形態が自然にできてきたために、そのサインが示す意味が2～3あることがあり、登下校時以外の場面では聞き手が意味付けをして修正しないと伝わらないことが多かった。 | <ul style="list-style-type: none"> いろいろな教師と、一日の流れや「実習を頑張ったら、〇〇のときに〇〇を・・・」などの長期的な見通しについてサインを使って話を要求することができるようになってきた。 登下校時の流れの最後に本児の好きな校長室訪問（または校長室の前で話をしてもらうこと）を取り入れることで楽しみが増え、それに向けて流れをスムーズに行動に移すことができるようになってきた。 「給食を食べたら」「作業を頑張ったら」など自分から一日の流れにかかわるような質問をすることが多くなってきた。また、教師からの質問に対しては、サインで答えることができるようになった。 |
| 評価 | B | B | A |
| 考 察 | 流れは理解して、見通しが持てているが、自分のやりたいことを我慢できないことが多かった。サインでやり取りを楽しむことのできる話題が増えたがサインの意味が重複し、分かりにくさも目立った。 | 一日の流れだけでなく、好きなM先生がネクタイをしていると「車で出掛ける」－「養・訓は？」などとサインで尋ねることが多くなってきた。伝えようという意欲が高まってきている。 | 特定の事物だけでなくいろいろなことに目を向けることができるようになってきている。そのことが確かな見通しにつながっていると思われる。 サインについては、動きは小さいながらも相手に分かるように伝えることができるようになった。 |

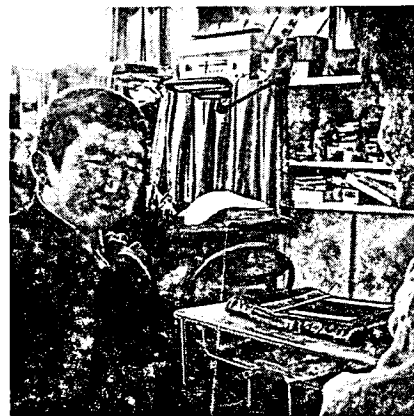
6 考察とまとめ（実践資料15参照）

(1) 1期の全体考察

○ サインの習得，サイン連鎖について

これまでに本児が習得していた本児独自のサインを活用しながら，教師の名前や新しい話題に関するサインなどいくつか習得できた。教師とのやり取りの中では，より分かりやすく相手に自分の要求を伝えるためにサインを組み合わせる話をするように，教師側がゆっくりとモデルを示しながらサイン連鎖を促してきたことで，

「〇〇の話をお願いします」や「〇〇を持って帰っていいですか」「養・訓をお願いします」など伝えることが多くなってきた。ただ，それが，自分の関心の高い話題に限られ，授業中や全校集会などでも離席してそれぞれの教師に話し掛けて回ることが多くなり，「今は授業中だから『ちょっと待って』」の言葉やサインも聞き入れることができないことも増えてきた。



○ 新しい話題，相手からの話題に対して

表出語（サインを含む）を増やし，やり取りへの意欲を高めるために，本児の伝えたい内容を把握すること，本児の動きに意味付けしたり，できる動きを用いてサインの形態を指導したりすることに心掛け，「保健室」や「軽トラック」，「言語治療室」，「遊戯治療室」など本児が好んで話す内容をお互いが楽しむことができるようになってきた。

自分からの一方的な話題だけでなく，相手からの話題にも応じることができるようになり，パターン化した内容を繰り返すだけでなく，言葉やサインを付け加えたり，関連するような話題に広げたり，要求された話題以外のものを返したりと試みたが，深まりはあまりなかった。しかし，本児の好きな活動（養・訓の話，写真の話など）を行う前に教師からの要望や指示されたことを守る約束ごとを決めることで，少しずつではあるが，こちらからの話題にも関心を向けられるようになり，また，一日の生活の中で，登校後や下校前の流れは大体見通しを持って活動できるようになった。

○ 家庭との連携

家庭では話題やその提供の仕方などにあまり変化は見られず，家庭との情報交換については，学校での行事や教師・友達の写真や文字カードなどもう少し家庭に提供する必要があった。また，特に印象的な出来事だけでなく，そのときどきの状況などまで情報を交換しないと本児が新しい話題を提供してきたときに対応できなかった。

(2) 2期の全体考察

年度が替わり，スタートから始めることが大切と考え，1期の取り組みを基本的に継続しながら，目標を絞り込むこと，保護者の取り組みやすさを考えた目標ということに配慮した。

○ サインの習得，サイン連鎖について

理解語は多いものの，表現方法の未熟さや未分化なサインのために伝わりにくいのだと考え，ただ言葉を増やすのではなく，意味の重複しているサインや言葉を分化させることに気を付けて指導に当たった。本児が今，興味を持っている話題や学校生活において必要となる

話題の中で、かかわる人によって同じ意味でも違うサインがあったり、一つのサインで複数の意味を表すものがあったりしたので、これらのサインを一本化したところ、主に本児にかかわる教師間で共通語ができ、伝わりやすさにつながった。本児から伝えたいという欲求が強いもの（強いと思われるもの）もあり、それらについてはこれまでの動きに意味付けしたり、新しい動きを取り入れたりしてサインを新しく増やした。（「校長室」、「引っぱった」、「投げた」、「先生の名前」など）サイン連鎖については、教師の反応を見ながら、「お話ーお願い」や「具体物を指さしー持って帰る」などこちらがモデルを示さなくても自分から伝えることが多くなった。



サインを使ったやり取りを楽しむN. Y児

○ 新しい話題、相手からの話題に対して

自分の欲求に基づく一方的な話題の提供が中心だったが、修学旅行や校外宿泊のような学習の際は、教師からの話題に合わせてそのことに関する自分の思い出や希望を話題にすることができた。

新しい教師や日ごろあまり接することの少ない他学部の教師などについては、シャツの襟首やネクタイを引っ張ったり、たばこ、ライター、眼鏡などを投げたり、といった行動を起こし、そのことを新しい話題にしていく様子が以前と比べ多く見られるようになった。

○ 家庭との連携

家族が理解できない見慣れないサインを使うことが増えてきたことにより、連絡帳などでその意味や話題を説明するといったことが多くなってきた。それに伴い、サインを理解して、使っていこうという意識の高まりが見られた。

(3) 3期の全体考察

2期の目標を基本的に継続しながら、さらに目標を絞り込むようにした。

○ サインの習得、サイン連鎖について

サインの習得状況に大きな変化はないが、よく使うサインは増えているようである。「マッ」、「マンマ」といったなん語だけでなく、教師を呼び止めておいてからサインを使って話題を提供するといった姿が見られるようになった。また、本児が話し掛けようとする教師も他学部の教師、現場実習先の指導員などと広がりつつある。

○ 新しい話題、相手からの話題に対して

「もうすぐ現場実習だね」「今日は作業があるね」「〇〇君はお休みだね」などといった教師側から投げかける話題に耳を傾け、静かに聞き入る姿やそのことに関する詳しい説明を求めるといった姿が、ある程度関心のある話題について見られるようになった。初めて会う人に対していたずらをしてしまうことは相変わらず見られるが、その前の言い聞かせをよく聞くことができ、約束を守ろうという気持ちの高まりは感じられるようになった。

○ 家庭との連携

本児が学校での出来事「現場実習が始まる」「〇〇先生は車で出掛けていなかった。」な

どをよく話すようになったことは本児自身の伝えたいという気持ちの高まりに加えて、保護者の本児と接する時間の確保、サインを理解する力の高まりによるものと考えられる。

(4) ま と め

本児の使うサインは独自のものが多く、また、未分化であることからいまだ、本児と接することの多いごく一部の人がしか理解できないものである。しかし、担任当初のそれよりはるかに伝わりやすくなっており、本児自身もなん語に加えて「サインで相手に伝えよう、サインなら伝わるかもしれない」というようなサインを積極的に使おうとする様子がうかがえるようになった。これは、周囲に本児のサインを分かる人が増えたことによるところが大きい。サイン連鎖については、より伝わりやすい伝達を考えると避けられないところで、例えば、「○○をお願いします」の○○が分からなくてもその子供に接する周囲の者は「何が欲しいのか」をどうにかして分かろうとするということにつながるのではないかと考える。本児は自分の興味のあるものを対象にしている際は連鎖ができるようになってきており今後も継続していきたい。

話題の広がりについては、一人に一つから二つの固定したものが中心だったが、それが増えたり、話題が変わったり、今までと違う人にその話題を提起したり、と変化が見られた。このことが本児の新しい、興味あるものを探ることにつながっていくのではないかと考える。

家庭では、1期から目標としてきた保護者自身がサインを使うことに関する取り組みは意識の高まりは見られたものの毎学期中途半端に終わってしまっている。このことは、家庭では本児に対して、サインを使わなくてもほとんど内容を伝えることができるということがあったため定着できなかったと考える。しかし、本児の将来の生活、特に施設や作業所などへの通所を考えるとサインは非常に重要になってくるので、家庭でも引き続きサインを使用していくことを呼び掛けていきたい。

7 今後の課題

担任当初、自分の言うことが理解できるのだろうか、この子はこのサインやなん語で何を言いたいのか、何も分からず、お互いが分かり合えないでいた。ほかの教師や保護者が当たり前のようにサインと言葉を交えて楽しそうにやり取りをしているのがうらやましく、また、自分もそうになれるかどうか不安に思ったものである。この戸惑いは、これから本児に初めて接する人たちが必ず通る道だといえる。

今年度初めて校外で現場実習を経験した本児は、予想に反して落ち着いて生活し、今回初めて接した指導員の方とやり取りを楽しむ場面も見られた。これが、これまでの成果だとはいわないが、学校外との連携の一つの成功例として考えている。

あと数ヶ月で本校を卒業して、通所の施設などで働くことを想定して、以下のように今後の課題をまとめた。

- 本児の生活にとって必要となるサインや言葉は何か、家庭と連携をとりながら整理していく。
- いろいろな人と話題を共有しやり取りを楽しむための伝達の方法を探る。(サインを中心として)
- 進路先との連携の方法を検討し、卒業後の支援に生かす。